

中世林下における語録抄と密參録について(上)

飯塚大 展

一、はじめに

玉村竹二氏によれば、五山に中国來朝僧が住持として在任中は、參禪并道も行われていたと考えられるが、やがて南北朝時代に入ると、寺院内にそれぞれの門派の拠点としての塔頭が成立し、その發達と共に、僧堂において全山の雲衲による修行はおざなりになっていったとされる。僧堂に入つて、參禪するものが、極めて少くなつた状態を、應永二十年當時、天龍寺の住持であつた惟忠通恕が、その語録『繫驢樞』上住天龍寺語録において以下のように述べてゐる。

三月望上堂、問答畢、散説、原夫本寺置常牧寮、乃堂中十六員老僧安下之處也、十六人内、抽二僧、輪番看寮之外、各在堂裏、單々安祥、二六時中、不離被位、蓋解開却七間僧堂之嘲也、自餘堂僧、禪誦之暇、内外兼學、遮手潤色此道、或有拘寺役者、是故限以四次坐禪、亦是百丈祖師、始設叢林之遺訓也、山僧邇來、每々齋罷入堂、視彼十六被位、坐者纔三四人、或七八人、縱雖居堂内、

猶如遊州獵縣之輩、不有究明己事體裁、可惜也、雖然人々一頭水牯牛、有不牧而常牧底也否、況常牧寮、每月常住所出費用繁多、其不自慚愧乎、自今以後、煩雜那時々點檢、不遵制者、有罰、莫道不言、結座云、堂中十六老聲聞、幾箇安禪不離群、解道龍宮赴齋後、天台山頂去春雲、喝一喝、

文明年中に活躍した彦龍周興による、以下の文章から、五山僧の志向した仏道のあり方が読み取れる。

某、力拯其弊爾、拈花微笑、立雪安心、臨濟肋下拳、德山末後句、是等徹骨徹髓、一駁駁著、迎刃解去、信手拈來、茶裏飯裏、舉足下足、得大自在、得大快活、推其餘以爲人、則入詩人文、或花或柳、或時經史子集、或時佛經祖錄、說得好、說不得也好、一旦出世、舉宗乘、則上堂、示家教則小參、稱西菴稱東堂、有拈香法語、有陞座普說、是吾所謂道也、下略(『半陶藁』與人絶交書)

玉村氏が指摘するように、五山僧の仏道に対する姿勢は、後半部分において端的に示されていると思われる。五山僧は、

その習学期においては、經史子集の外典や仏經祖録の内典を碩学の師について学び、漢文の語彙をより多く獲得することが求められた。公案參得がその前半部分には述べられているが、必ずしもその比重は大きくない。むしろその膨大な語彙獲得にもとづく詩文の作成に多くの時間と労力を費やしたとさえ言える。応永年間に、始め五山僧として出発した一休宗純は、五山僧慕哲龍華のもとで、外学とともに、詩偈作成の入門書であつた『三体詩』を学んでおり、事実その詩句がモチーフとなつた偈頌を『狂雲集』の中に見出すことができる。五山の住持になる様な僧侶は、巨望上堂・小參の儀式において遺憾なくその博識と文才が発揮されねばならなかつた。また入山疏を始めとする寺院内文書の作成は、四六駢體体によつて作されたから、その軌範とされた『蒲室疏』に対する講義が盛んに行われ、師資により伝授されていった。

林下各派は五山とは異なつた伝統を生むに至つたが、その特徴の一つは公案參得を中心とする修行体系の確立にあつたと思われる。本稿では、林下道元派下と大徳寺派(大応派徹翁派下)の公案禪について、その一端を考察したいと思う。また林下の公案禪を語録抄と密參録との補完関係にあるとの作業仮説に基づき、『臨濟録抄』を素材として考察を進めた。

二、林下道元派下における公案參究

応仁・文明の乱以降、室町時代後半より江戸時代初頭にかけては、最も活発に曹洞宗各派が地方に展開した時期にあたる。それぞれの地方に展開した各派はやがて独自の宗風を確立し、それは特に公案体系および公案解釈において顕著になつてくるように思われる。地方に展開した各派は、その地方に最も早く進出し、外護者を得て建立された寺院を據点として、次々と本末関係を有する子院を開創するという形で、一定の地域に根ざしていった。その派の據点寺院となつた本寺は、しばしば輪住制という形をとり、派内で末寺関係にある主だつた寺院の住職が本寺へと晋住し、一定期間住持を務めるといふ形で、本寺の権威化と經營的基盤を固めていった。かくして直接的な本末関係にある寺院間の門派意識、帰屬意識が強固なものとなつて行つたと思われる。しかし、後にその上部に位置するであろう永平寺、総持寺に対する帰屬意識は稀薄であつたと思われる。勿論、形式的に自己の同一性を曹洞宗に求めることはあつたが、それは大枠で自己の正統性を述べる際に限定される。即ち、自らは臨濟宗とは異なり、かつ五山の僧ではなく、曹洞宗に屬し、道元の法孫であることの正統性を強く主張する場合がそれである。各派毎にこのような同一門派としての強い帰屬意識が醸成された背景に

は、それぞれの派が独自の教義的裏づけを有していたことが一因として想定される。以下に、林下曹洞宗の事例として、永平寺における公案参得の伝統について考察してみたい。

室町時代以降、曹洞宗道元派下における公案禅の援用は、その比重を増し、各派毎の本参の目録が作成されるほどに体系化されてくる。公案禅の盛行は林下の共通の傾向と思われ、大応派下の二派、即ち徹翁派下（大徳寺派）、関山派下（妙心寺派）では、盛んに密参録が抄出された時代であった。五山叢林においても、室町時代後期以降、幻住派が盛んになると、林下の本参や密参録と類似性を持つ抄物が作成されるようになる。

さて、林下曹洞宗における、管見の本参目録の中で比較的早い成立に属するものに、愛知県渥美町常光寺所蔵の「傑堂派参話目録」がある。常光寺は、寒巖派下の普濟寺十三門派の一つ潔堂派の寺院であり、まとまった切紙資料としては最も古い部類に属する、文明年間から天文年間に至る二十一年の切紙を所蔵していることで知られている。これに拠れば、潔堂派では、伝授前、伝授時、伝授後、更には末後之参という様に、公案参究の階梯を設けている。嗣法相統が大事（参禅）了畢を前提としており、少なくとも室町時代以降、室内参禅修行（公案参究）が盛んに行われていたことを示すものと言える。

駒澤大学図書館所蔵『室中切紙』所載の「嗣書諸目録之切紙」を見てみたい。これは、永正十二年（一五一五）に集成されたとみられる切紙目録である。そこには、夜参並びに三位に関する切紙・本参の名が見られる。

嗣書諸目録之切紙

- ・梅絹二切、・国王授戒作法一枚紙也、・菩薩戒作法菩提心之紙也、・受業明時椅子作法一枚紙也、・戒律伝授作法一枚紙也、・自家訓訣・龍天授戒作法一枚紙也、・宋西記文一枚紙也、・達磨一心戒作法一枚紙也、・応量器梅絹一尺四方一切上關書ノ内數ノ六條、・仏祖正法眼蔵血脈一枚也、・没後授戒作法一枚也、・嗣法論作法一枚紙也、・印形図一枚也、空塵書三枚紙也、永平仏祖正伝受経儀軌一枚也、臨濟下血脈一枚也、無極授二月江二記文長紙也、夜参図三枚紙ノ紙也、三光普所大・肝要句儀一枚也、嗣書卷一冊、曹洞合血本則二冊、普門品相承之次第二冊、三位之次第并月両箇二枚也、如浄老師授道元和尚儀軌、夜参廿八透冊、此内二透八種ノ之也、梅絹、嗣書卷二冊、統物并一様本二冊、小参之秘訣二冊、夜参出標天如節田相承次第、朝参計謹共宗門一大事因縁、禅相伝附既畢、
- 永正十三歳丙子（一五一六）極月十三日夜半
- 宗門一大事不遺一物正忠伝既畢、
- 天文二季癸巳（一五三三）十月廿七日夜半、於最乘金

剛寿院、宗門一大事不遺一物宗長伝附既畢、此外伝後之參敵換十六則最秘極也、若流布他見輩者暗却正法眼編却命者也、

日本天文廿年^{辛未}(一五五一) 今寛永十歳^{癸酉}(一六三三) 九月吉日 (9ウ)11オ)

曹洞宗道元派下に相伝された切紙の中でも、嗣書・血脈伝授に関する切紙の比重は極めて大きいものである。嗣法伝授の前提に参禅了畢が求められたように、切紙も同時に伝授されたものと思われ、嗣法の際に師資の間にに秘密相伝される一連のものとして位置づけられていたことが上記の史料から確認できる。前述の通り曹洞宗における公案参得の階梯は、通常は三段階で構成されている。その名称は、たとえば、「自己」「智不到」「那边(那時)」、あるいは「鉄」「銀」「金」、あるいは「最初」「中当」「向上」、さらには「一透」「二透」「三透」「初」「中」「後」とさまざまであるが、三段階の構成はほぼ各派共通すると言える。これを広義には「三位」というが、狭義には「自己」「智不到」「那边(那時)」を指し、その三位による、祖師の語句や機縁を体系化した物を「三位之透(さんいのおとりのと)」「と」といふ。「無極授月江記文」切紙によれば、美濃補陀寺の無極慧徹の会下にあつた月江正文が関東に赴くに際して、師の無極から示された旨訣とされるもので、その中で「三位之透」の項目及び由来が説かれている。

次に、室町時代後期から江戸時代初頭にかけての永平寺における公案参得の状況を見てみたい。中世には瑩山紹瑾(一二六四〜一三三五)に擬せられる十則の公案拈提集『秘密正法眼蔵』(永平寺蔵)「伝授室中之物」にその名が見える⁷⁾や、瑩山のもととされる、一六二則の公案注解『報恩録』二巻、あるいは大智(一二九〇〜一三六六)にも『無尽集』『古今全抄』などの公案拈提の抄物があつたとされる。ちなみに永平寺関連の公案集としては寂円派義雲(一二五三〜一三三三)の編という伝承を有する『永平寺秘密頂王三昧記』⁸⁾が現存する。本書は、漢文体ではあるが五十三則の公案拈提集である。同じく寂円派の所伝と考えられる、『南谷老師三十四関』三十四話本参⁹⁾等の書名を有する三十四則の公案拈提集の伝本も現存する。本書は、道元が中国留学中に天童山の如浄より伝授され、建長五年(一二五三)正月十五日に懷葬に伝えられたという識語を有するものである。永平寺室中には、この『三十四話』の本参は現存していないが、以下に紹介する光紹智堂の『切紙目録』や、蘆州高郁の『伝授室中之物』には、本書に基づく多種の本参が相伝されていたことがわかる。

永平寺三十世慧輪永明禪師光紹智堂(一六一〇〜一六七〇)によつてまとめられたと思われる「切紙目録」には、百五十七種の切紙を列記した後に、「参禅卷冊竟」として、別に十二種の門参資料の目録が附記されている。

參禪卷冊覽

- (1) 一、秘參獨則十六則 一卷
- (2) 一、獨則 一卷
- (3) 一、永平秘伝參 一卷
- (4) 一、永平獨則參 一卷
- (5) 一、永平秘伝書伝後參編地也 一卷
- (6) 一、大儀小儀 二卷
- (7) 一、伝授作法「折本」 一冊
- (8) 一、參禪惣目録 一卷
- (9) 一、三十四話抄參禪切紙 一冊
- (10) 一、三十四話名目 一冊
- (11) 一、三十四話抄「共」 一冊
- (12) 一、門 參 一冊
- (13) 一、嗣書三段訣 二冊
- (14) 一、正法眼蔵拔書 一冊
- (15) 一、大白峰記 一冊
- (16) 一、五葉集同抄 一冊
- (17) 一、根脚抄 一冊
- (18) 一、碧岩參禪 三冊
- (19) 一、血脈起 一卷
- (20) 一、嫡嗣伝授儀式 一卷
- (21) 一、伝授古則秘伝書 一卷

(22) 一、法華八卷之秘參

一冊

(朱印白文「慧輪永明禪師」)

(朱印「光紹高風」)

更に、永平寺三四世醍醐高都(大仙国光禪師、元禄元年一六八八示寂)が、貞享五年一〇月永平寺退院に際して記録した「伝授室中之物」によれば、永平寺室中において伝授相伝され、室中の參禪箱に収蔵された本參・切紙類が列挙されている。

伝授室中之物

- (1) 一、後開山御守後住伝授之時、可拜箱入、
- (2) 一、伝授古則入派向上最初ヲ、十二通之目録
- (3) 一、三十四問之抄、是レ伝法之時、不究者、吾宗之非師家、壹冊在之、
- (4) 一、天童如淨和尚御自筆之仏嗣書之写、本書重而可見、
- (5) 一、明全和尚御自筆血脈写ヲ、本書重而可見、
- (6) 一、伝授入派竹篋背触三位透脱之目録在之、
- (7) 一、過去心字之血脈一大事因縁渡之、同過去七仏之血脈在之、
- (8) 一、伝授入大死底之參禪諸門派ヲ渡ル、
- (9) 一、道場狂嚴儀式
- (10) 一、両家血脈御大學之目録在之、

- (11) 一、伝授之作法、從曩祖之本筋目也、永平寺隱居地二翼、嫡子一人二可付之、
- (12) 一、永平寺參禪之目錄、代 在之、渡之、
- (13) 一、宗門二柱、是_レ仏法之二柱俱云、祖意教意、仏法王法之二柱也、代可秘之、
- (14) 一、催促之切紙、
- (15) 一、居士之嗣書、此内色々ノ切紙俱在リ、壹冊、
- (16) 一、碧岩百則之參、壹冊
- (17) 一、御開山弁道話 小本、折本
- (18) 一、法華八卷微妙之參話、壹冊
- (19) 一、五家宗派之分々、壹冊
- (20) 一、吉祥參禪入派竹篋背觸、壹冊、光紹改之
- (21) 一、永平寺本參、壹冊、御州改之、
- (22) 一、伝後之參目錄、壹冊、光紹改之、
- (23) 一、三十四問之名目_并十則正法眼、御州改之、
- (24) 一、三十四話之抄、_同參禪、_并切紙、壹冊、御開山以來在之、
- (25) 一、吉祥山諸話頭總目錄、壹冊
- (26) 一、正法眼藏之内梅花卷、光紹代、明光院二休大居士日牌、_初納之、小本一冊、
- (27) 一、大陽渡浮山黒狗 底、切紙、二十三之内_リ在之、
- (28) 一、正法眼藏拔書、壹冊、
- (29) 一、天童三十四問之名目、壹冊、
- (30) 一、達磨五葉集、壹冊
- (31) 一、宗門第一、書円悟碧岩集古頌之參話俱_三在之、三冊、
- (32) 一、永平三位_三入派、壹冊、竹篋背觸也、此類多_ク、
- (33) 一、永平独則等參、壹冊、
- (34) 一、仏家大事、壹冊、
- (35) 一、毫山成道參、壹冊、
- (36) 一、十九代門鶴勸化帳、写、一枚
- (37) 一、嗣法儀式、
- (38) 一、守袋函縫様切紙、一枚、
- (39) 一、長門龍文寺吉祥山之由来在之、徹翁和尚_リ送之者也、此度相渡_ス、
- (40) 一、箱入秘伝之參目錄ノ通嫡嗣渡之、
- (41) 一、室内事伝授之作法、青表紙折本也、光紹改之、
- (42) 一、十八種之劍、
- (43) 一、牌塔伝授之切紙、壹枚
- (44) 一、同多子塔前伝付/作法、一枚、
- (45) 一、同拈奪瞻之切紙、壹枚、
- (46) 一、同伝法/作法室中秘訣、卷本也、
- (47) 一、同伝法之作法總目錄、卷本也、

(48) 同開山伝法之作法、二巻、

(49) 一、太白峰記、壹冊、

(50) 一、根脚七道抄、壹冊、

(51) 一、嗣書三段訣、壹冊、

(52) 一、当山伝法之作法、一枚、紙小結六ツ合、大把
二成二ツ、

(53) 同三ツ合、一把成二ツ、後住代々可見之、

(54) 一、古三物、三通、は無用所、

以上

右者、參禅箱之内ニ在之、

右者、皆是不入室中者也、

伝授之時可相渡之者也、

高郁改之

此外方丈主人之左右ニ置之、

本校割ニ在之、

貞享五戊辰、

十月吉日 高郁

(下略)

江戸時代前期には、実に多くの切紙や本参と言った相伝資料が永平寺に所蔵されていたことを知ることができる。永平寺所蔵の三位之透に依拠する本参目録及び本参としては、『永平総目録』及び『伝三清規』(『永平総目録御州本参』)が現

中世林下における語録抄と密参録について(上)(飯塚)

存する。『永平総目録』の奥書に以下のように見える。

球和尚以自筆書写之

于時元和九癸亥年小春十八日 永平十八世

于時慶長十一丙午年八月廿三日 祚球(花押)

伝附 祚天座元

吉祥山永平禅寺総目録之次第 堅可秘之、

鎮徳寺現住雪菴叟(花押)

これによれば、永平寺一九世(現世代による)祚玖(球)が

慶長一年(一六〇六)に祚天(後の永平寺三三世)へと伝授

し、それを更に祚天の法を嗣いだ鎮徳寺三世雪庵宝積が元和

九年(一六三三)に転写したのが、本書であり、その内容は

三位の透りの参に基づく話頭(公案)目録であり、その構成

は以下の通りである。

(1) 自己、祖師禅之入派、大人頭之古則……………二〇則

(2) 死活当頭之一句、大悟之正当……………一〇則

(3) 自己之点处之透、出身……………四則

(4) 自己本分之透……………七(九カ)則

(5) 自己醒处之透……………六則

(6) 承当下活句之透……………七則

(7) 自己目前一致之透(法眼宗、自己)……………一〇則

- (8) 忘智寂之三関之透……………六則
 - (9) 自己真照之渊源之透……………八則
 - (10) 智不到之入派……………一二則
 - (11) 一句之智不到之透……………一二則
 - (12) 智不到異弁眼之透……………八則
 - (13) 智不到処更三転ス……………一〇則
 - (14) 智不到処路チ不レズ転ス……………八則
 - (15) 不転之転之透……………六則
 - (16) 偏正一致之透……………一〇則
 - (17) 至到之諍訛之透……………一〇則
 - (18) 那边着到之透……………六則
 - (19) 位裡点側之透……………六則
 - (20) 阿誰之透(那边体得這裡行李を含む)……………一二則
 - (21) 向上之古則……………一四則
 - (22) 末後大用之透……………八則
 - (23) 相統之段……………一一則
- 鎮徳寺と永平寺との關係を見ても、永平寺が天正二年(一五七四)の一向一揆で全焼したあと、一九世祚玖が宝物を携帯して北庄(福井市)に逃れ、この地に一字を建て新永平寺と号したとされる。織田信長による一揆平定後、永平寺は再建され、新永平寺は祚玖の弟子祚天に与えられ、北庄城鬼門の鎮護として鎮徳寺と改称されたといふ。この永平寺焼失

を契機に、これ以後の公案參究の傾向が変化していったのではないかと推定する。

『永平総目録』と密接な関係にある、『伝三清規』について見てみたい。本書は御州書写による『吉祥山永平禅寺話頭総目録』の本參史料であり、その透參の項目とそれに配当された話頭(公案)をあげれば以下の通りである。

- (一) 自己大入頭
- (1) 一、首山竹籠背觸(2) 二、黄檗六十棒
- (3) 三、香嚴樹上(4) 四、臨濟活埋
- (5) 五、臨濟無位真人(6) 六、六外之一句
- (7) 七、南泉斬猫(8) 八、雪峰龜鼻蛇
- (9) 九、万機休罷(10) 十、百尺竿頭一步
- (11) 十一、南院啐啄同時眼(12) 十二、芭蕉拄杖
- (13) 十三、五祖演牛窓櫺(14) 十四、雲門闍宇
- (15) 十五、奚仲造車(16) 十六、塩官犀牛扇子
- (17) 十七、茶陵橋板墮落(18) 十八、松源大力量人
- (19) 十九、睦州擔板漢(20) 二十、百丈野鴨子
- (21) 廿一、雪峰古澗寒泉(22) 廿二、南泉平常心是道
- (23) 廿三、盤山猪肉大悟(24) 廿四、玄沙指頭築破
- (25) 廿五、保壽本来面目
- (26) 廿六、雪峰尽大地沙門一隻眼
- (27) 廿七、馬祖水潦大悟(28) 廿八、紫胡狗子

- (29) 廿九、竜潭紙燭吹滅、(30) 三十、百丈野狐、
 (31) 卅一、岩頭是凡是聖、(32) 卅二、天衣折擔大悟、
 (33) 卅三、倩女離魂、(34) 卅四、明上座本來面目、
 (35) 卅五、龐居士不落別処。

(一) 自己転処透、 六則、

- (36) 一、雲門花藥欄、(37) 二、蓮華峰庵主、
 (38) 三、霍山四下藤條、(39) 四、船舷未跨棒、
 (40) 五、雲門転句、(41) 六、東山水上行、
 (三) 自己本分之透、 五則、
 (42) 一、宏智真空劫、(43) 二、巴陵縫坐具行脚、
 (44) 三、雪峰看々東辺底、(45) 四、南泉茅鎌子、
 (46) 五、雲門鐘声七條、

(四) 自己目前一致透、 八則、

- (47) 一、世尊見明星悟道、(48) 二、靈雲見桃花悟道、
 (49) 三、雪峰三処相見、(50) 四、雲門露柱交參、
 (51) 五、長沙仏名經、(52) 六、鏡清雨滴声、
 (53) 七、鏡清其源、(54) 八、南泉牡丹花、
 (五) 智不到透、 十八則、

- (59) 五、風穴通不犯、(60) 六、船子夾山、
 (61) 七、趙州至道無難、(62) 八、芦花雪月一色、
 (63) 九、外道問仏、(64) 十、國師無縫塔、
 (65) 十一、曹山孤峰不白、(66) 十二、投子海門秋靜、

- (67) 十三、古德三一色、(68) 十四、藥山見月大笑、
 (69) 十五、洞山独木橋、(70) 十六、趙王平地望高坡、
 (71) 十七、玄沙三白紙、(72) 十八、宏智廓而無際問答、
 (六) 一句之智不到透、 七則、

- (73) 一、定上座佇立、(74) 二、雲門話墮、
 (75) 三、藥山陞座、(76) 四、藥山腰間刀、
 (77) 五、六祖不汚染、(79) 六、当局之誰、
 (80) 七、歸堂送人之成都頌、

(七) 智不到異弁眼、 五則、

- (81) 一、南泉水牯牛、(82) 二、玄沙三種病人、
 (83) 三、南泉端居丈室、(84) 四、雪峰輕打我、
 (85) 五、曹山不変異、

(八) 智不到転処透、 七則、

- (86) 一、宏智親切為人底句、(87) 二、雲門北斗裡藏身、
 (88) 三、羅山起滅不停、(89) 四、仰山半月相、
 (90) 五、仰山鏡撲破、
 (91) 六、點天童宗珙上堂普天普地、
 (92) 七、宏智上堂芦花雪、

(九) 智不到不転透、 九則、

- (93) 一、夾山境、(94) 二、巴陵吹毛劍、
 (95) 三、万法不侶、(96) 四、宏智清白傳家雪月光、
 (97) 五、石霜無鬚鎖子、(98) 六、浮山八十翁々、

- (99) 七、曹山諸仏本源、(100) 八、宏智不能緣、
(101) 九、世尊生下棒、
(102) 一〇、偏正一致之透、

- (102) 一、真歇空却己前自己、(103) 二、洛浦佛法大意、
(104) 三、長慶佛法大意、(105) 四、嚴陽尊者一物不將來、
(106) 五、教意五位、(107) 六、異類五位、

『永平總目錄御州本參』は、『永平總目錄』の公案目錄に必ずしも全面的に依拠しているわけではない。またこのような「三位之透」による本參が、寂円派の伝統の中に早い時期からあったどうかはかは疑問の余地がある。しかしながら、本書の存在は、これ以降顯著となる本參・切紙伝授の傾向の予兆であり、それはそのまま庵派下の公案參究の受容へと繋がっていったものと推察される。

永平寺所蔵の本參・切紙の現存状況や、上掲の『切紙目錄』及び『伝授室中之物』所載の本參・切紙類の記事を勘案すれば、永平寺二十七世靈巖英峻(万照高国禪師)、同二十九世鉄心御州(大覚仏海禪師)、同三十世光紹智堂(慧輪永明禪師)の頃に、永平寺における切紙・本參の収集と整理が積極的になされたものと考えられる。このような公案參究を中心とする修行のあり方は、代語事件を象徴的な出来事として、批判排斥されていくように思われる。

三、大徳寺派における入室參禅について

一休の著作とされる『自戒集』には、養叟宗頤の陽春庵における教化活動が擲掄、あるいは罵倒されているが、これらの活動は室町時代における大応派徹翁派下(林下大徳寺派)の僧侶にとって、一般的なものであったと思われる。

康正元年ノ秋ノ末、養叟、泉ノ堺ニ、新菴ヲ建立ス。菴号ヲ、陽春菴ト云。異名ヲ、養叟ノ入室屋ト云。同十二月二堺ヘ下向アリテ、安座・點眼、菴ヒラキニ、五行ヲ行フ。

一一八入室、一一八垂示・着語、一一八臨濟録ノ談義、
一一八參禪、一一八人二得法ヲオシウ。

ソノヘンノ狂客、無住榜ヲツカマツリ候。ソノ無柱榜
二云。(下略)

『自戒集』

大徳寺南派の派祖東溪宗牧の語録である『佛惠大圓禪師語録』には、卷二に入室勸辨の項目が立てられている。所収の入室勸辨の記録は、(一)永正六年己巳年元旦於養徳院、(二)冬至入室、永正七庚午十一月十四日於江州中興寺、(三)永正八年辛未元旦於一枝軒の三会である。以下に、永正六年元旦の入室勸辨を挙げる。

入室勸辨

永正六己巳年元旦於養徳院

問云、江西馬大師、因龐蘊居士問、不與萬法侶者是什麼人。請首座下一轉語看。

首座云、天地之太祖、萬物之根源。師云、意旨如何。座云、隨處爲主。

師云、大師答曰、待汝一口吸盡西江水、即向汝道、意旨如何。座云、盡情鳴鳥報新春。師云、報底響。座云、徹底老婆心。師便打云、甲乙丙丁庚戌己、洛陽牡丹新吐蕊。

一僧云、天上天下唯我獨尊。師云、如何是獨尊底。僧云、偏界不曾藏。師便打。

一僧展掌云、露。師云、意旨如何。僧云、踔跳香案上。師云、踔跳底、響。僧云、現大人相、便喝。師便打。

一僧云、如日虚空住。師云、意旨如何。僧云、照天照地。師便打。

一僧提起坐具云、這一實秘在形山。師云、秘在底、響。僧擲下坐具云、七花八裂。師云、意旨如何。僧云、收拾修補却爲團。師便打。

堅

勝

中世林下における語録抄と密參録について(上)(飯塚)

一僧云、只在目前。師云、目前底作麼生。僧云、透徹十方。師云、意旨如何。僧云、孤迥夕。師便打。

一僧云、天地玄黃宇宙洪荒。師云、意旨如何。僧云、撥不散、擁不聚。師云、不聚底、響。僧云、佛祖無分。師便打。

一僧云、成龍昇天、成蛇入草。師云、意旨如何。僧云、天下衲僧不知落處。師云、爲什麼不知。僧云、鉄壁鉄壁。師便打。

一僧云、容顏甚奇妙、光明照十方。師云、意旨如何。僧云、撐天撐地。師便打。

一僧云、在眼曰見、在耳曰聞。師云、意旨如何。僧云、普。師便打。

一僧云、常處地獄、如遊園觀。師云、意旨如何。僧云、通貫十方。師云、通貫底、響。悟云、當面相遇。師便打。

一僧云、炎天梅藥、雪裏芭蕉。師云、意旨如何。僧云、不逐四時凋。師云、不凋底、響。僧云、大地元來載不起。

桃

岳

九

一四一

師便打。

一僧云、無處迴避。師云、爲什麼無處迴避。僧云、處々全身。師便打云、引得黃鸞下柳條。

一僧云、逼塞虛空。師云、逼塞底如何。僧云、風吹不入、水洒不着。師便打云、從來疑着這漢。

一僧云、從門入者不是家珍。師云、如何是家珍。僧云、當軒大坐。師便打。

一僧云、大在天地日星、小在虫鳥艸木。師云、意旨如何。僧云、徧界不曾藏。師云、前來有人道、更道々々。僧云、露堂々。

一僧云、乘風騎雨。師便打。

一僧云、即今滿室。師云、意旨如何。僧云、更有堆席。師便打。

一僧云、生鉄崑崙雲外走。師云、意旨如何。僧云、大悲千眼不能看。

意

荃

空

祐

可

繁

才

一僧云、聲前拍不散、句後覓無蹤。師云、爲什麼無蹤。僧云、明暗雙々。師云、意旨如何。僧云、鐵團樂。師云、待汝一口吸盡西江水、即向汝道、意旨如何。僧云、恰似蚌蛤禪。師云、如何是蚌蛤禪。僧云、露出肝膈。師便打云、敲出鳳凰五色髓。

松

侍者恚

このような入室勤辨の記事は、他の大徳寺派の語録の中には見出せない。しかしながら、それは実際に入室勤辨が行われなかったのではなく、語録編纂の際に排除されたものと思われる。大徳寺の塔頭龍光院には、春浦宗照の入室勤辨の記録が残されており、大徳寺百九十六世傳外宗左による「春浦和尚眞蹟」との極書きが付されている。そこには、「永享十二年冬節廿日、就大用庵入室」から、「因明室光公禪定尼三十三回忌入室、宝徳二年九月廿一日」に至る入室勤辨を見ることが出来る。同じく入室勤辨の史料としては、笑嶺宗訥の入室勤辨を侍者仙嶽宗洞が記録したものが田中博実氏によって紹介されている。林下曹洞宗道元派下においても、入室勤辨が行われており、その記録として『耕雲傑堂和尚之入室』が現存する。

次に垂示下語について見てみたい。古岳宗巨の著作である『大徳寺夜話』には、一休宗純や養叟宗頤の垂示下語、

代語の記事が見られるが、更に溯つて大燈国師や大徳寺一世の徹翁義亨の頃より、垂示が行われていたと思われる。

一、徹翁和尚兩夜垂示、々々過テ、一僧障子ヲアケテ、ヤラ、面白ノ雨ヤ、ト云テ出テ、詩力ナンソヨ吟タ。徹翁闡之云、大無道心ナ僧チヤ。垂示ノ代語ヲモ工夫シテ、明日アカツテ可聞ト八不思シテ、カウ有ルト云テ、明日乃擯出。其辛辣如此也。

『大徳寺夜話』

一、一休透西洞院時、有問、市中還有隱麼。云、有。僧云、如何是市中隱。云、何似生。此與ナル答話也。是二合テハ、有ト答タハ、セメテチヤト、先師ノ仰ラレタ。有照問一休、生死到来時、如何回避。云、上無攀仰下絶己躬。大照禪師闡之、仰ラレタ。一休二八似相タ答話ソ。是程ノ事ヲモ不知。小魚大魚、一休下語、ヤマガラ胡桃ヲマワス。又、後園驢喫草、云、雲深猿盜栗。是等ノシヤレ事上手也。大宗禪師、聖諦第一義、下語云、類ニ似テハソマク。一休垂示下語ニ、吹面不寒楊柳風ト云句ヲ着ラレタ。弘宗禪師云、師家ニ向テ可使句サヘ知又トテ、座敷ヲ遂立ラレタ。(下略)

『大徳寺夜話』

一、喫茶去ハ、師家之使語也。昔有一官垂示下語使此句、大照(養叟宗頤)不肯而即代語ニス。一官云、嫌テ

中世林下における語録抄と密參録について(上)(飯塚)

ノケテ、何トテ代語ニ御沙汰サウラウソ。大照云、是ハ師家之語也。

『大徳寺夜話』

更に松ケ岡文庫所蔵の『龍岳和尚葛藤』⁽¹²⁾には、春浦宗照(松源院開祖、正統大宗禪師)やその法嗣美伝宗真の垂示が記録されている。

大宗禪師垂示曰、大地恁麼熱、向什麼処回避去。清心庵云、苦。師云、意旨如何。清云、死。清還云、和尚作麼生。師云、截断紅塵水一溪。後來參問師云、清之答話如何。師云、苦トイハハ、必ト云也。言ハ、死水ト苦ハ無キ也。師又曰、苦ト云処ニ、意旨如何ト拶セハ、截断紅 溪ト云ン也。

大宗禪師、因米搗垂示曰、人打米耶、米打人。師代云、苦。僧云、意旨如何。師覆却曰。後來予問天琢和尚曰、苦ト云タル処デ、聞ヘタルコト也。僧力鈍ナルト云ハ、苦ト云ハハ、色相也。色相トミルハ、已截断也。意旨如何ト問タハ、鈍也。

松源和尚(春浦宗照)、一乱ノ時節、星出ル也。因之垂示、松源師代云、見怪不怪、其怪自壞。

松源禪師、因齋垂示曰、度人情一句、如何置心頭。師代云、絶己躬。後來實傳拏之、各有下語。師代云、絶己躬。僧云、絶己「躬」。師云、生鐵崑崙載雪行。蓋是

- 八、持是院、臘月四日、江 打死入。其時持是院一家藤兵衛同死。半隱云、條字加之可矣。同死。已後、於養徳院、没、因之垂示、雪中二打死入。故二有雪字乎。
- 10 養徳院有家賊、時々人皆失財。師因之垂示云、於此各道將一句來、作商量。死代云、臨濟未是白拈賊。
- 11 池寺白翁之時、蠅入火、把之、雖入水中、終死矣。翁垂示曰、火災不免、重逢水難時如何。大宗重拳之、各下語來看。師代云、苦。僧云、意旨如何。師云、死。僧云、畢竟如何。師曰、幽州猶自可、最是苦江南。有相句也。又、前三々後三々。又、七九六十三。
- 12 師垂示曰、女子賣女色、仏子賣仏經、是同是別。師代云、前三々後三々。并、傾城ノ錢ヲトツテスグルモ、仏子ノ仏經ヲ賣テ過ルモ同事也。皆色相ノ上也。大宗垂示也、重拳之。
- 13 師垂示曰、法界亡者、与法界供養、何多少。師代云、前三々後三々。養叟垂示也、重拳之。
- 14 師喫甘瓜之次、垂示云、安口中底是什广物。師代云、心甘舌苦。大宗師代語之。
- 15 實傳垂示曰、月薫禪尼十三白忌之辰、在南方以白飯供養。於養徳院以何供養、諸人試道看。一僧云、醍醐毒藥一時行。師云、過也。一僧云、正好供養。師云、意旨如何。一僧云、一碗飯三盞酒。師云、更參三十年。正好供

- 養、意旨如何。琢師代曰、崑崙咬生飯。咬之字、供養ニヨシ。一僧云、謹謝供養。實曰、謝什麼供養。僧云、再犯不容。實曰、不許呈伎倆。琢師曰、再犯不容。師家向テハワルキ也。琢師打曰、閑伎倆。又ハ、与一掌、閑伎倆トイワン也。再犯不容トアルニ、不許呈伎倆、ワルキ也。琢師代曰、皈依佛法僧。一僧云、曲順人情。實云、意旨如何。僧云、閑事、實云、不是、々々。琢、閑事ニアワサル也。一僧云、不別和尚供養。實曰、如何是和尚供養。僧云、面上挾竹桃花、肚裡參天荊棘。實曰、過也。天琢師代曰、如何是和尚供養。師代曰、銀碗裡盛雪。飯來喫飯、困來打眠。五臺山上雪蒸飯。一僧云、一喝拂袖去。實曰、呈伎倆為什麼。僧再喝。實曰、猶是伎倆漢。琢師曰、呈伎倆為什麼。アラハ、某罪過ヨキ也。再喝ワルキ也。一僧云、三分廿七分苦。實曰、過也。實代曰、三箇崑崙鉄酸餡、一双無縫木饅頭。僧云、意旨如何。師云、仏祖咬不破。僧云、月薫禪尼却咬破麼。實曰、咬破。僧云、与麼則畢竟作麼生。師云、霜葉紅於二月花。琢云、与麼則ノ字、スキタル也。
- 16 實傳垂示云、河州之兩陣、箭鋒相拄、作家戰將、退敵於八方、死人無數。於此如何受用去。後來天琢師聽之曰、平地上死人無數、トアラハ、可也、ト云々。一僧云、大火聚裡弄毛塵。一僧云、法王運開、果海時別。一僧云、

石從空裡立、火向水中迸。一僧云、斬釘截鉄。一僧云、心逕蒼生。大事ノ句也。受テハ、アワザル也。一僧云、當軒大坐。一僧云、千兵易得、一將難求。一僧云、手把金鞭賀太平。一僧云、露。一僧云、截断紅塵水二溪。一僧云、好个時節。一僧云、黒漆桶裡盛墨汁。實云、截断衆流、不留涓滴、如何會得去。師云、遍界是刀鐮。僧云、意旨如何。師云、鑊湯無冷処。後來天塚和尚後聽之代曰、截断衆。一僧云、如何受用去。師云、鑊湯。遍界是刀鐮ハ、カサナル也。別語、代語、スコシ違也。

以上のように、垂示は忌日(齋食)をはじめ、様々な機会に行われていたことが確認できる。また師家がその際用いた公案に対する代語、下語が、後にその弟子や参学者によって再び取り上げられ、再吟味されることもあった。養叟・春浦・実伝の語録には、垂示はその編纂の際に排除されているが、東溪宗牧の語録には、垂示の部立てが存在する。そこには、華叟宗曇・養叟・春浦・実伝らの垂示・下語が取り上げられており、注目される。以下、養叟宗頤関連の垂示を挙げれば、以下の通りである。

17 響、大應國師住鎌倉建長時、相州太守享國師及諸山尊宿於第宅。太守因盛黄金於盆、置諸尊宿前云、請各下語得取這金。一尊宿云、攫金者不見人、即取金。國師默然。

中世林下における語録抄と密参録について(上)(飯塚)

後來華叟和尚問養叟云、國師默然処殊勝也。雖然未十成、代國師如何是。養叟云、一喝拂袖去。華叟代曰、以手推出盆可默然。師曰、若是山僧向佗道、我付與汝便可推出盆。

18 養叟和尚垂示曰、雪覆千山、孤峰為什麼不白。養叟代曰、一喝拂袖去。後來春浦和尚代曰、早覺寒毛卓豎。師下語云、依稀似曲纒堪聽、又被風吹別調中。

19 養叟和尚垂示曰、老僧日々登山截棒、誰是活底人。養叟代曰、老僧愛嗔不愛喜。僧云、意旨如何。叟云、水歸大海、終作波瀾。師下語云、五逆闍闍。

20 養叟和尚垂示曰、我見燈明佛、本光瑞如此。是以於燈籠上、一句道將來。代曰、踢倒燈籠消光明。師下語云、照見和尚面羸。

養叟宗頤の語録は、その大部分が散佚しており、その全体を現時点では見ることができない。

21 大照禪師者、天澤的流、而龍臺中興之活祖也。室中語要亦夥矣。吁、世乱道微兵燹不熄、埼失厥本録、不能聽全機。今幸點檢殘纒得一二、以為語録。庶幾千歲于雲補其缺略而已。

于時元祿乙卯季秋日、焚香拜書。

劣孫 宗沆 印

したがって、大徳寺派系の語録抄や密参録において、断片

的に養叟の言説が取り上げられる場合を除き、関連記事は稀であり、その点からも『大圓禪師語録』は貴重な史料と言える。

ちなみに、松ヶ岡文庫所蔵『雜古則 七拾三則 丙本』には、以下のように、養叟の遺偈(第六十一則)及び自贊(六十二則)が公案として参ぜられていたことを確認できる。

22 六一、

養叟辞世、喝、末後一喝、具眼者并取、

下吾、這老賊、

并、根本ノ上ニ、具眼ノ者ノ并取セウ事ノアラウヤウニ云タハ、賊也、末後一喝、具眼者并取ト云タハ、截断也、

連喝兩喝、

下吾、顧前顧後、

并、連喝八兩喝也、前ノ喝ハ、色相截断、後ノ喝ハ、本分ニ成リ切テ、喝シタ也、了、

23 六一、

養叟老拙多年為熙藏主書、熙禪者畫予陋質、混沌未分先、老僧既突出、混沌分披來、老僧也突出、何似生無等匹、誰道此主實、相持如蚌鷸、不恁麼々々々、落在漁人掬溢、喝一喝、

并、主トハ養叟、實トハ春浦、師学機々相投シタ処ハ、

如合蚌口也、不恁麼々々々トハ、蚌ハ、卒度シタイヤシイ者也、爰ハ、サデハナイ、養叟、春浦ノ上ハ、ヨリ拙イ類テハナイト云タ方也、漁人トハ、指春浦云タ、佛法ハ一人ニ帰シタト、養叟ノ褒美シタ方也、喝一喝、根本ノ上ヨリ、佛法ノ上ヲモ截断シタ一喝也、蚌鷸ハ、一休ノ傍出ナル処ヲ比シテ云タ、我ニ無印可不可印可類也、了、

(38才 39才)

更に林下曹洞宗の峨山韶碩(峯山紹瑾の法嗣)と南浦紹明との問答が東溪によって取り上げられている。

24 我山問南浦和尚、瑠璃殿上沐浴糞水時如何。南浦曰、沐浴糞水且置、如何是瑠璃殿上事。山云、無攀仰。浦曰、已是上無攀仰、為什麼沐浴糞水。我云、珍重。

『龍寶紀談』にも、同様の記事が見られる。

25 大應國師到建仁寺、瑠璃殿下ニシテ而峨山、曹洞宗僧

問、國師云、瑠璃殿上沐浴糞水時如何。師曰、沐浴糞水且置、如何是瑠璃殿上事。山云、上無攀仰。國師曰、既是無攀仰、為什麼沐浴糞水。山云、珍重。便去。先師曰、珍重処、而所可働也。然、曹洞宗ナレハ故許而置之。総而問事ハ不レ及、是非。國師ノ答話モ好クモ無レ之也。

垂示は、独立した一書として記録されることもあった。東京大学文学部国語研究室所蔵『大圓禪師垂示夜話』は、東溪

宗牧の垂示に対して、注釈(弁)を付する点でも貴重な史料である。

26 佛涅槃垂示曰、分身千百億、那箇身涅槃。僧云、借逕經過。執襟露肘境界也。本分上有涅槃様二、分身千百億ト云事ヲ借テ云タソ。師云道々。尚本分上二涅槃ト云事力有サウニ、重責云タソ。尚試タソ。僧云、再犯不容、拂袖去。イカナ和尚ナリトモ、サノミテコ又事、ナ被仰ソト云テ、座敷ヲ蹴立テ去タソ。

27 師垂示曰、今日去テ佛何ニ往ヤラン。師代曰、柳緑花紅。本分上二八、去ト云事モ、往ト云事モ無ニ、有様ニ云タハ、無道理事也。月白風清ヲ著スルヲ、一首ノ道歌ニセウ用ニ、柳緑花紅ト云カ似合タホトニ、著タソ。今日去テ佛ケイツクニ往ヤラン柳八緑花ハクレナイ。

28 宗吉月忌之中、酒ニ酔テ、事外タへ、酔テ候ト力。師曰、誰力酔フト。師代曰、佛祖不識。又曰、我亦不知ト(9ウ)テモ好ト。又曰、張公喫酒李公醉。是ハ、色相ノ方ニ用ソ。向ノ人力飯ハ、コチモ同様ニ飯テ酔ソ。無什麼道理ソ。是ハ、正傳ト見様ソ。又曰、向ノ人力飯タヲ、コチ力酔タソ。是ハ、逆ノ用也。是ハ、傍出ノ用也。天上星八地下木、南地竹北地木。是ハ、皆同見様也。

29 師垂示曰、佛念衆生、々々念佛、各勸辨膏。師代曰、佛トハ、指本分デ云也。本分ハ、背負胸駄シテ、充滿シ

中世林下における語録抄と密參録について(上)(飯塚)

テ有ヲ、念衆生ト云タ也。衆生不念佛ハ、本分ハ、行住坐臥、隨逐シテ有ヲ、衆生ノ不悟ヲ云也。

30 師垂示曰、拳、黃檗云、大唐國裏無禪師。黃檗底且置、這裏如何受用。師代曰、這老賊。弁云、禪師ノアリサウニ(10才)云タハ、元來禪師ト云事力アツテコソ。

31 師垂示曰、住山說法作什麼用。師代曰、以此深心報應刹是。僧云、報恩事麼。僧云、如何是報恩事。師云、月白風清。

32 師云、眼裏塵沙、再來土、境界ハナンソ。弁云、本分テ候。ナセ二本分ヲハ、眼裏トモ用イ、又再トモ用ルソ。

33 永正六年正月元日、師垂示曰、元正啓(本方)萬物新、衲僧門下第幾機。師代曰、路從平処嶮。僧云、如何是嶮處。師云、黒花猫兒面門塘。

本書には、『大圓禪師語録』に見られない垂示も掲載されている。

四、大德寺派の公案体系と解釈の枠組み

大德寺派の密參録には、臨濟録密參録、碧岩録密參録、碧岩類則密參録、雲門録密參録、百則密參録、五十則密參録、大燈國師百二十則密參録、維古則密參録、等が挙げられる。私は、現在これらの史料紹介を基礎的作業と

して研究を継続している。⁽¹³⁾ 今一例として松ヶ岡文庫所蔵
雜古則密參錄公案目錄「クハ一〇六二一」を取り上げ、
雜古則密參錄 において參ぜられていた公案の体系を見て
みたい。

甲 雜古則 廿七則

- 一、栢樹子變通、
- 二、萬法請益并西江水、
- 三、地獄并請益、
- 四、雲雲見桃花請益、
- 五、香嚴擊竹請益、
- 六、見明星請益、
- 七、碧岩第一達磨武帝請益、
- 八、牛窓櫺請益、
- 九、馬祖不安請益、
- 十、斬釘截鉄請益、
- 十一、汾陽拄杖請益、
- 十二、岩頭古帆請益、
- 十三、香嚴樹上請益、
- 十四、普化街市請益、
- 十五、四喝請益、
- 十六、水牯牛請益、
- 十七、拈華微笑請益、
- 十八、舌頭
- 十八、三玄三要請益、
- 廿、興化安樂法門、
- 廿一、龐居士難々請益、
- 廿二、馬大師翫月請益、
- 廿三、兩処不答話請益、
- 廿四、宣州坦化主看宗、
- 廿五、我從賢聖法來、
- 廿六、玄沙白紙請益、
- 廿七、岑大虫成佛請益、

乙 雜古則 廿七則

一、勿嫌底法

二、阿弥陀佛、

奥二又記有少異

- 三、不是汝四大
- 四、南泉心不是佛、庚冊廿七則亦有
- 五、一字入公門、世諦佛法二通之内有之
- 六、死句活句、
- 七、懈怠比丘
- 八、世諦佛法無二、二通
- 九、向上向下
- 十、正知正見、
- 十一、七花八裂、
- 十二、佛祖膏肓、
- 十三、此地無金三兩
- 十四、牡丹花下睡猫
- 十五、蓋天蓋地
- 十六、乾坤、
- 十七、惡語破人
- 十八、五帝三皇、
- 十九、大悟十八度
- 廿、百丈不作不食、庚ノ冊二毛有之
- 廿一、誰欲招
- 廿二、性地明白、
- 廿三、冷笑一声
- 廿四、夢之一字、
- 廿五、劫之一字
- 廿六、欲無欲、
- 廿七、凡諸有相
- 廿八、趙州無、
- 廿九、煩惱即菩提
- 卅、五味一味平等
- 卅一、這邊那邊此岸彼岸
- 卅二、善惡不二邪正一如、二通
- 卅三、止々不須説、
- 卅四、父母所生眼
- 卅五、師家為人躡裁、三通
- 卅六、常在於其中
- 卅七、同病相怜、
- 又、阿弥陀佛

鏡清新年佛法

明教新年佛法

丙 雜古則 七十四則

- 一、大燈回錄頌、
- 三、飯栢樹子一則
- 五、大惠西江水頌
- 七、虛堂三轉語
- 九、回向嘆佛
- 十一、雪豆教外別傳底
- 十三、牛頭未見四祖
- 十五、長沙黃鶴樓
- 十六、外道理智心境
- 十八、黃鶴鐘樓念贊
- 廿、踈山冬來事
- 廿二、言外末後拳頭
- 廿四、慈明片雲橫谷口
- 廿六、達摩付法偈
- 廿八、趙州古澗寒泉
- 卅、南泉水牯牛
- 卅二、趙州將境示
- 卅四、浮山見某有悟
- 卅六、目前真大道
- 卅八、月菴坐禪工夫頌
- 四十、月菴奚仲造車
- 二、徹翁遺誠語
- 四、虛堂南浦古帆語
- 六、徹翁道箇非目前
- 八、流轉三界中
- 十、東山三佛
- 十二、達磨分皮分髓
- 十四、松源衣頂相
- 又、同
- 十七、佛思衆生、
- 十九、興化嗣法香
- 廿一、過橋拆橋
- 廿三、直指人心
- 廿五、一処透千処
- 廿七、若以色見我
- 廿九、雪峯古澗寒泉
- 卅一、楊岐三脚驢
- 卅三、瀉山声色堆
- 卅五、至極參禪作学道
- 卅七、運菴虛堂斬猫話
- 卅九、空手鋤頭頌
- 四一、徹翁三轉語
- 四二、翠岩莖蘿地獄
- 四四、長養工夫
- 四六、南浦投機頌
- 四八、松源省數錢
- 五十、清規這卯裏
- 五二、具眼僧
- 五四、三種機閑
- 五六、心通不知音
- 五八、善僧惡僧
- 六十、大宗辭世、
- 六二、養叟自贊
- 六四、意生化身
- 六六、善知識病苦
- 六八、疑迷
- 七十、灌溪瀕麻雲門拈後
- 七二、正法眼藏
- 七四、惠超然旧同參
- 四三、一千七百則公案一句道來
- 四五、我王庫内無刀
- 四七、松源山門佛事
- 四九、内秘菩薩行
- 五一、德雲別峯相見
- 五三、万法外有一法
- 五五、慙慙作麼
- 五七、教外別傳
- 五九、富貴知識
- 六一、養叟辭世
- 六三、先師一撈色相保愛
- 六五、浮山九帶
- 六七、曹源滴水刺語
- 六九、七賢女作麼々々、
- 七一、開山初心學者
- 七三、瑠璃燈棚頌
- 丁 雜古則 卅二則
- 一、達磨四人上足
- 三、瀉山百丈充典座
- 五、洛浦僧問百千佛
- 二、浮山見某
- 四、三聖到德山
- 六、僧問古德不坐禪

中世林下における語錄抄と密參録について(上)(飯塚)

七、僧問古德路逢猛虎、

七、南泉明日遊莊、

八、香林僧問三界、

九、古德遣香五文、

八、僧問古德口是禍門、

九、滴水滴凍、

十、陀羅尼、

十一、松源衣并頂相、丙ノ冊ニ有之

十、塩官會下、

十一、南岳馬祖說似一物、

十二、趙州沙門一隻眼、

十二、松源自贊、

十四、月菴坐禪工夫頌

十三、達磨付法偈、

十四、虛空發身、

十三、古人云貧是土常

十四、月菴坐禪工夫頌

十五、一隊鷲鷲、

十六、僧問風穴語默、

十五、清涼大法眼捲簾、奥ニ有之、大同小異

十四、月菴坐禪工夫頌

十七、世尊未離都卒、

十八、僧問鏡清新年佛法、

十六、雪豆独眼菴、

十八、人無心合道、一老ニ不考

十九、明教新年佛法、

廿、僧辭趙州摘楊花、

十七、黃龍住黃檗

廿、五拽參石頭

廿一、煩惱即菩提、

廿二、三世諸佛一代藏經、

十九、大惠超然頌

廿、五拽參石頭

廿三、睦州現成公案、

廿四、欲識佛性義、

廿一、三佛在五祖

廿二、靈山末後

廿五、古德棕櫚葉散、

廿六、虛堂警發、

廿三、外道問佛世尊有密語

廿四、南泉見鄧隱峰、

廿七、唯此一事實、

廿八、唯稱禪師猛虎、

廿五、南院啐啄同時

廿六、万物妙是日神

廿九、疎山匡仁京師出大廣、

卅、香林三界中、

廿七、清涼大法眼、前ニ有之大同小異

廿六、万物妙是日神

卅一、古德五逆闍雷

卅二、開山辭世頌、

二八、虛堂警發

卅一、大惠云本色衲僧

卅三、三世不可得

廿九、保寿開堂三聖

卅一、大惠云本色衲僧

己 五拾則

卅二、草木国土

卅一、大惠云本色衲僧

一、浮山見暮、

二、慈明見泉大道、奥ノ冊ニ有之

戊 三拾三則

一、大惠大悟十八度、

二、楊岐問慈明、

三、宗門第一書、

四、汾陽十八問、

三、趙州不將境示人、

四、傳大土空手之頌、

五、疑迷不疑悟、

六、雪豆二龍爭珠、

五、外道問佛、無雜堪時

六、西院明伽藍、

三則有

黑花龍見

七、趙州至茱萸、

八、古德云若人病時、

九、雲門滅後見真容、

十、僧問大燈聽雨答、

十一、睦州現成公案

十一、法昌遇風幡頌、

- 十三、因果歷然
- 十四、從門入者不家珍、
- 十五、長養工夫
- 十六、聽雨寒更盡、
- 十七、六祖風幡
- 十八、富貴千口少、
- 十九、我為法王
- 廿、佛滅二千年、
- 廿一、耳朵兩片皮、
- 廿二、乞兒弄飯碗、
- 廿三、若以色見我、
- 廿四、秘事秘曲、
- 廿五、烟籠不遮梅香、
- 廿六、水自竹辺流出寒、
- 廿七、都盧一團鉄、
- 廿八、鉢孟口向天、
- 廿九、神
- 卅、萬物妙是神、別ノ冊ニ有之、世則ノ冊
- 卅一、運菴虛堂猫児、庚ノ冊ニ有之、
- 卅二、活喝死喝、
- 卅三、不會作略、
- 卅四、一種是声、
- 卅五、心徑苔生、
- 卅六、聖人復主、新年ノ佛法ノ寄
- 卅七、一心不生、
- 卅八、大火聚裡弄毛塵、
- 卅九、南山燒炭、
- 四十、松源省數錢、丙ノ冊四十八ニ有之、
- 四十一、清風拂明月、
- 四十二、万法外別有一法、
- 四十三、語默動靜、
- 四十四、笑中有刀、
- 四十五、玄沙獄、
- 四十六、帶累別人、
- 四十七、一処透千処万処一時透、
- 四十八、洞山亡僧遷化之答、
- 四十九、當躰佛、
- 五十、藥山問李翱、

庚 雜古則 六拾三則

- 一、六祖因明上坐
- 二、南泉莊社、
- 三、怨以恩報、
- 四、徹翁庭ノ木石、
- 五、語底默底、
- 六、一有多种、
- 七、焦磚打着、
- 八、人無心、
- 九、一口兩舌、
- 十、常見斷見、
- 十一、笑中有刀、
- 十二、含元殿裏、
- 十三、胞子弄孫、
- 十四、万庵常壁、
- 十五、常処地獄、
- 十六、途路雖好、
- 十七、瞞庵謂僧云、
- 十八、正明不露耶、
- 十九、首長三尺独足立、
- 二十、阿難讀佛、
- 廿一、是法平等、
- 廿二、天竺尊者、
- 廿三、洞山生住院、
- 廿四、寒山拾得人岩窟、
- 廿五、趙州小玉元無事、
- 廿六、客是主人、
- 廿七、南泉心不是佛、乙冊四則亦身之、有異
- 廿八、真歇登天台、
- 廿九、汾陽三玄三要、
- 卅、五洩參石頭、
- 卅一、宗派圖、
- 卅二、法罰、
- 卅三、烟籠不遮梅香、
- 卅四、後醍醐問大灯、
- 卅五、大海知足、
- 卅六、曹山僧問清稅、
- 卅七、到江吳地尽、
- 卅八、見物主眼卓豎、
- 卅九、無風荷葉動、
- 四十、行到水窮処、

四一、一句合頭語

四二、佛悟後云奇哉

十三、正法眼藏付屬迦葉

十四、一字不說請益

四三、麤上引猫兒

四々、雨中見杲日

十五、鑑嘆

四五、魯祖凡

四六、百丈不作不食

四七、楊岐八種棒

四八、三世諸佛

王 雜古則 四十則

四九、陀羅尼

五十、驅耕夫牛

一、同道唱和

二、天寒人寒

五一、自休藏主

五二、兩下地上濕

三、劈腹剜心

四、六月不熟

五三、釣絲紋水

五六、深明二上坐

五、頭弱鬢

六、錯

五四、不知何處寺

五八、截斷紅塵

七、移步不移步

八、迷悟相及

五五、達磨東土不來

五九、碧岩百則

九、天鑑無私

十、青着竺前

五七、趙州問僧發足甚處

六〇、官不入針

十一、三界万靈

十二、向上闍捺子

五九、入徹幽玄底

六二、官不入針

十三、蒸麩不生芽

十四、全駄作用

六一、運菴問正侍者

六二、官不入針

十五、晦堂遷化

十六、極睡裡不睡

六三、撫州疎山匡仁

六二、官不入針

十七、天上月明

十八、不具底人

辛 雜古則 拾五則

一、慈悲無慈悲

二、五受容

十九、採菊東籬下

廿、大尽三十日

三、玄妙

四、覺鉄鷲先師無箇話

廿一、方木不通圓孔

廿二、伯樂一顧

五、栢樹忘意真意

六、柳綠花紅

廿三、雲在嶺頭

廿四、六夕三十六

七、水月鏡像

八、開山投機頌

廿五、烏張三

廿六、大灯哥

九、目前真大道

十、王庫無刀

廿七、板齒生毛

廿八、心徑蒼生

十一、曹山辜負

十一、王庫無刀

廿九、今夜一輪滿

卅、會則途中受容

十二、吹毛用了急須磨

十二、吹毛用了急須磨

卅一、虚空未現前

卅二、下語着語

又十一、面前目前

卅三、見怪不怪

卅四、月白風清

卅六、一毛頭上獅子

世七、除熱得清涼、
世九、一句了然、

世八、失、
四十、八境界、

大徳寺派下の公案解釈について、「臨濟八種面目」(「八境界」とも呼称される)を取り上げてみたい。林下大徳寺派系の語録抄・密參録においては、「八境界」のそれぞれの項目は、公案理解の原理として、或いは公案における体系そのものとして機能している。更に、「八境界」は一つの公案として、『百則密參録』『百五十則密參録』の中に見出すことができる。

例えば、大徳寺派の密參録である滋賀県大津市西教寺所蔵『本来面目』には、以下のように見える。

第廿九、本分。

下語、遍界不曾蔵、又吹毛劍、

弁、有無ワタラス天下間充滿アル物本分候。此故遍界不曾蔵、下語シタソ。鉄團樂、本分打碎スト云心テシタ下語ソ。鉄黒色ホトニ、物ニソマヌソ。本分物ソマヌソ。此故、鉄本分用タソ。吹毛劍、本分ノ名ソ。

第卅、現成。

一、現成。

下語、月白風清。
弁、月白風清上、道里ナイソ、自然ナル処カ、現成ソ。

中世林下における語録抄と密參録について(上)(飯塚)

柳緑花紅云、自然カタチソ。柳ミトリニ見、花紅ミユルカ、マツスクソ。是、現成ソ。

第卅一、色相。

一、色相。

耳朶兩片皮。

弁、生得來、眼耳鼻舌身意ナスワサカ、色相テ走。

第卅二、截斷。

一、截斷。

下語、斬釘截鉄。

弁、色相云物、大イタツラ物トミキツテ、吹毛劍以、釘鉄キル如クニスル処、截斷走。

第卅三、直指。

一、直指。

下語、車不横推。

弁、物マツスクニイ、アラワスカ、直指也。車横推物也。マツスク也。月在天水在瓶、月天アルソ、水瓶アルソト、サシテミセヌ処、直指也。

第卅四、為人。

一、為人。

下語、平生心膽向人傾。

禅宗云者、平生截斷用ルソ。是平生心膽也。向人傾云処、截斷スベシソトミヤウソ。為人シタソ。

无孔鉄鎚當面擲。

無孔鉄鎚、アナノナキカナツチ也。用タヽヌ物也。是タトヘタ也。其無孔鉄鎚面擲ミセタ処、本分為人シタソ。

又、百花春到為誰開。

是、春誰開ケトイワ子トモ、百花ガ開ソト為人シタソ。是現成為人也。爰弁八、一句因縁御示アリテ、手ヲラレテ御スクイアル力、為人テ候。

第卅五、賊。

一、賊、

下語、作賊人心虛。

又、牡丹花下睡猫児。

弁、上何ナフシテ、底人タラスヤウナ事、賊テ候。虚言ノ事、賊云物、心ミナ虚物、イツハリハカリソ。牡丹花下睡猫児、蝶取クワント云心、真実睡ニテハナシ。賊云ハ、此ヤウナル事ソ。

第卅六、機。

一、機、

下語、錦包毒石。

又、黒花猫児面門斑。

弁、見分カタキ処、禅宗ノ機用テ候、白キカ黒カハ、見分ヨケレトモ、マタラナハ、見分難ソ。錦ケツコウナ物

シヤニ、中特石ツヽミタハ、ヲソロシキ、見分難心ソ。

撈曰、八境界中肝要用境界アリ、取出弁ヨ。

弁、色相肝要用フルテ候、其子細、本分・現成・截断・直指・為人・賊・機云モ、皆色相上、色相サヘ能用レハ、心法ヨイソ。色相ワロク用者、心法ワルイソ。印可印證取云トモ、此色相能受用タル人アル事、色相アシク用イタ者、印可ナイソ。然、千七百則公案無ナルソ。爰以、八境界中色相肝要用也云ヘリ。臨濟云、食物入物肝要、イカナル珍物美食、ケカレタ器物入タラハ、味カアルマイソ。麩草食物ヨキ器物入タラハ、風味カヨカラウソト也。然間、色相能用得タル人、心清ヨイホトニ、色相アルヘキヤウニラサムルガ大事也。能々工夫可有。

(26ウ〜29ウ)

林下曹洞宗道元派下においても、「臨濟八種面目」は、切紙、本參等において參究されている。佐賀県武雄市円応寺所蔵『參禅』(石屋派本參。円応寺八世華嚴宗藝所持)に以下のように見える。

臨濟八種面目。師云、機ヲ。代、活機テ走。師云、句ヲ。代、午日打三更。師云、賊ヲ。代、赤手門庭立走。師云、句。代、驢糞達人換眼珠。師云、性ヲ。代、烏黒鷲白走。師云、句。代、山高海深。師云、本分。代、赤肉テ走。師云、句ヲ。代、崑崙無縫罅。師云、直示。代、末直ニ云テ走。師云、句ヲ。代、眼横鼻直。師云、為人。代、

夫レ々々成ツテ走。師云、句。代、違驢作驢、違馬作馬。
師云、自性。代、千代若テ走。師云、句ヲ。了々常知。
師云、色相。代、柳在緑花在紅テ走。師云、句ヲ。代、
庭前紫面薇。衣。

永平寺には、同寺二九世鉄心御州より三〇世光紹智堂へ、
寛文三年（一六六三）に相伝された臨済宗血脈に関する切紙
の写しである。「一条紅線」切紙が現存する。

（複製）
「一条紅線」

「図省略」

臨済命根元不斷、
一条紅線牽手中、

佛祖代、嫡、相承而、吾今授レ你、伝附既畢、尽未來
際、莫レ令二断絶、嫡子一人之外、不レ可二伝附、于時寛
文三 庚辰 年九月廿八日書之、秘訣別紙不レ言、靈
山・少林・曹溪古風、連続之事、臨済和尚在二黄檗⁽⁴⁾会
中、行業純一也、於六十棒下、得無生法忍、於レ斯、
立二八種面目、汾陽和尚、有時示衆云、先師臨済和尚
レ有二八種面目、一者本分、二者自性、三者色相、四

中世林下における語録抄と密參録について（上）（飯塚）

者直示、五者為人、六者機、七者賊、八者性、吾門レ為二
種草者、切須如是面目具足、禪者如何具足、八種面目、
便一喝、云、參、

夫八種面目者、臨済和尚、黄檗棒下開二正眼、是則、
本来本分・未生已前之本身也、於大愚脇下專^(原力)三拳、得二
本分事、自性識破、帰与二一掌、是則、一機之発処也、
從レ是見二色相、於レ此立二本分事、是則、色相・本分也、
色相者、五蘊境界也、六根・六識・六境界也、六根・六
識・六境界也、是十八界、証レ是為レ悟、不レ証二色相、為
レ迷、為人者、二儀門下、垂手接物、隨レ機、説レ仏説レ法、
直示者、本分無一物所、示レ是也、機者、一機之発処、
本分事也、是行レ棒行レ喝、把住放行、殺活自在、有時者、
拈二一茎草、為二丈六金身、有時者、取二丈六金身、為
二一茎草、是機之受、用也、賊者、一機之動也、喚レ僧為
レ俗、喚レ俗為レ僧、性者、本分ノ事也、山高海深、柳緑花
紅、是三関、機・賊・性之内、三世俱備、三世俱陰、
向上向下、此中也、面目自用、面目放下、
于時寛文三庚辰歲九月廿八日

永平廿八世御州和尚在判、
附授光紹老衲畢、

この切紙に拠れば、臨済が黄檗希運の会下で大悟し、その
悟りの内容を「八種面目」として定立したと言つ。後文に拠

れば、汾陽の示衆の語に、先師臨濟和尚に、八種面目が有つたとする。「八種面目」(八境界ともいう)は、臨濟宗における公案解釈、或いは公案体系の基本であり、例えば、林下大徳寺派(大応派徹翁派下)では、語録抄や密參録において頻用される術語である。又、曹洞宗所伝の切紙の中にも、臨濟宗の公案の代表的な体系として、「八種面目」が取り上げられる。永平寺所蔵『永平總目錄』(宗案所持)によれば、曹洞宗にも「八境界」に準ずる「四柱」「九川」「八海」等の公案解釈の枠組みが存在した。

吾ガ宗諸話頭之四本柱、

活句、色相、阿誰、本分、

吾宗九川・八海有り、活句、色相、阿誰、本分、機、

賊、性、現成、是レハツノ海也、為人ノ一句、此為人、

一句ヲ添テ九川也、此ノ九川・八海ノ旨ヲ參学シテ、一千七百

則ラ体得スル也、

永光寺所蔵の切紙によれば、『天童三十四問』の公案を「活句・色相・阿誰・本分」の四つに分類しており、これに對して面山瑞方は『洞上室内断紙棟非私記』の中で批判している。

以下、『八境界註』(上下二巻、明暦二年一六五六刊)に依拠しながら、八種面目の各項については注釈する。「本分」とは、この切紙に拠れば、臨濟が、黄檗の六十棒下に大悟し

たことが、とりもなおさず、本来本分に契当することであり、父母未生以前の本身そのものだとする。

(図略)青、本分、青トハ者、私云、青ノ字ヲ上ニイタハ、黑色通用タリ、青ト者、黑色也、生仏之分ヲ無ク、ホトニ、
図ニ黒色ヲ出シタリ、青ト者、黑色ナリ、黑色ト者、五色未分ノ処タリ、其重ハ、法界融朗ニシテ、更ニ方処無ク、阿文意、又註ニ、終ニ仏祖ノシハツラノ、イデ又重チヤリ、ホトニ、亦ハ、大黒闇トモ云ソ、青ノ字ヲ句ニ云、碧ノ九巻澗水堪如レ藍、已上、爰ヲ家門テハ、四料簡ノ則ンハ、人境両俱奪トモ、位ヲ定メ、五位ノ則ンハ、兼中到ノ一位、廓庵十位之則ンハ、第八俱忘ノ位ナリ、サテ、マツカウアルニ、大事深々ノ得心ノ有ル事チヤリ、
本分、私云、本ト者、本来、分ト者、五色未分也、生仏未分、天地未分、混沌未分、三未分ノ処タリ、此假ラケハ、ヨツカシモノヲ、靈山ノ釈迦ニ渡ク、少林ノ達磨請取ルヨリ已来、乱劇、今ニタエ又ソ、迦葉親聞、祖祿不了ト、渡シツ、請取ツシタ故ニ、殃及ニ兒孫ニ、錯迷、今ニタエ又ソ、阿文意、

又、註ニ、本分上云ハ、向上ク、タダカミノ事ニ、向上ノ一路、千聖モ不伝、学者弄形、猿似レ捉影、国師、又、註ニ、本分トハ、天地未分、未生以前ヲ指シ云タリ、爰力、諸仏ノ根源、衆生生命脈タリ、此假ラケハ、ヨカツ

シニ、靈山ノ釈迦渡シ、少林達磨請取ルヨリ已来々、乱劇、
今ニタエ又ソ、ホトニ、請取り渡シタ、手モトガ、殃及ニ
児孫、誤リ今ニタエズ、天下ノ衲僧家ノ大病ト成タソ、

(八境界註 上巻 1オ、2オ)

「自性」とは、単に「性」ともいい、臨済が黄檗の指示で
高安大愚のもとに参じたとき、自分の事を得たことが、自性
を悟つた事だとする。しかし、この切紙には、「八者性」と
あることから、重複する。大徳寺派の密参録の「八種面目」
の次第では、「現成」の項目がここに定立される。

「色相」とは、五蘊の色身、或いは六根・六識・六境の十
八界をさす。

(図略) 色相、私云、此段ハ、四角立、八角立、順逆、間ハ
迷前ト見レハ、一一ノ句面、迷ト見落ソ、亦註云、色相ト、
現成トハ、迷悟ノ異タソ、悟ト現成、迷ハ色相タソ、有
物語ミ、一人銭ヲ盗テ、仏ノ香ヲ買ニシ、善ニテラウカ、悪
ニテラウカ、有人ノ手ニ、門前ノウバゴゼ、心ヲ能クモ
タシメ、迷ハ悪、悟ハ善タソ、二義、国師、又註云、
迷心起妄故ニ、十界三千事ノ万法ヲ、色相ト云也、是
流転ノ作法タソ、何ニ色相カ、流転ノ有様ソト云ニ、万
法ノ色相ヲ、有ト聞ケハ、有ト計、無ト聞ケハ、無ト計、其
コク々ニ滞留シ、縛セラルル程ニ、此カ流転ノ基、迷情不
達ノ人ノ事タソ、花ヲ見テハ、色好花、ソコニ著ヲナシ、

中世林下における語録抄と密参録について(上)(飯塚)

月ヲ見テハ、サテモサハヤカナ月カナト、ソコニ留ル程ニ
迷妄流転テハ無力、畢竟ハ何ト悟レハ、現成ト成リ、迷ハ、色
相ト成タソ、迷ノ故、此ニ彼ニ滞留シ、花月ノ愛著ヲ成シタ
ソ、悟テ見レハ、月マテヨ、花マテヨ、少モ自ノ角ト立又ソ、
悟上ノ人ノ送りナレハ、月ハ花ハ花ソト、ナガ又キテ、
心ナキコソ、道ノ道ナシ、真向見ルガ、悟上ノ人ノ見成シ様
タソ、代云、サル沢ノ池ノ心ニ見ナシテ見ル人モナキ秋ノ
夜ノ月、本分・現成ハ、偏正ニ落ヌ処、色相ハ迷イソメテ、
偏正ト分タソ、ホトニ、此色相ヲ位ニ当ル時ハ、十牛十位ノ
中ニハ、第一尋牛、五位ノ中テハ、偏中正ニ当リサウヨ、サ
テ、図ヲ八角ニシタハ、色相万法ト、カトヒシガ出来タソ、
大龍小蛇、頭角、偏正ノ、カドヒシノ分ヲ処チヤソ、意
ハ、花ヲ愛シ月ヲ愛シ、ソコ々々ニ、シハリトメラレタハ、
サテ、カトヒシノ出来様テハ無イカ、サテ、赤ノ字ヲ置
タハ、色相ハ、迷情流転ノ処チリハ、赤ノ字ヲ置タソ、意ハ、
当処、五尺ノ境界見ミ、血氣依タソ、ホトニ、血氣迷、
流転ノ法タソ、

(八境界註 巻上、30ウ、31オ)

「直指」とは、本分無一物の処を示すことであるとする。

(図略) 直指、私云、直指トハ、アリメノ事タソ、達磨西
来シ、西天四七ノ法要ヲ、唐土ニ為シ弘、蘆葉ニ乗シテ来
タ、即今モ、コノ直指タソ、以心伝心、深密ト云モ、此

直指タソ、呈ニコソ、爰ヲ栢樹子トモ示シタソ、畢竟直指学伝法要ト云ハ、二ツナク、委曲無イ事タソ、爰ヲ教意、維摩テハ、直心ハ菩薩道場トモ説テサレタソ、国師、又、註ミ、直指トハ、元来ノ有様ヲ不改、有ノ尽、スグメノ事ヲテ、少モ委曲ノ無処ミ、天ハ高、地ハ低ト見、人間ハ賢、猪鹿ハ横ニ走ラ迄ミ、何ニタル子細モ無イ事タソ、又、註ミ、自己目前ヲ直指ト云タソ、意ハ、火ニ向テハ火迄、水ニ違テハ水迄、少モ念ガ出ヌ事ミ、念トハ、凡夫有念ノ事ミ、卒度モ念ガ出レバ、自己ノ本智ニキズガツキ、本智ヲソソンザスソ、サテ、図ヲ四角ニシタハ、卒度モカドヒシノナイ、有リメノ体チヤソ、万法ノ消息、十界ノ当体、本来本色ノ作法ト見流シ置タソ、代云、水緑リ山青シ居リ見ニ成敗、ドツコモ此消息ト見ミ、山下路頭ノ景、御座ノナガメト打成テソウソ、少モアラタムレバ、ハヤ自己ノ本智ニキレメガ出来ルソ、呈ニ、是非ノ念ガ出ネバ、ドヒシモ無イ、有リ目マツ直テ処ヲ、四角ニ図ヲナシタソ、五家七宗ノ時ハ、法眼宗ノ意ソ、法眼宗テハ、山は山、水是水ト、少モ不損、正平ニ花ヲハ花テ置、月ヲ八月テ置ソ、サテ、紅ノ字ヲ置タハ、元来其俣ノ有様ニシテ、花ハ紅迄、少モアクラサ、又コトソ、畢竟直指、趙州因僧問、如何是西来意、庭前ノ栢樹子、是カ直指タソ、趙州ノ庭前ノ栢樹ニ向テマシマス時分、西来意ト問ニ依テ、目前ノ栢樹ト答

ミ、州ノ心地ニ、少モ子細ハ無ク、到モ喫茶去、不到モ喫茶去、趙州一代、学者ヲ示シ給フニハ、平生ノ言語ヲ以テ示シ給フ也、呈ミ、趙州ノ当処ニ向テ、見得親切レハ、前無ニ釈迦、後無ニ弥勒、釈迦モ弥勒モ、終ニ重ハシラナタソ、百姓日曰、銅犁ヲ携テ、重キコトヲ不知、爰カ自己ノ本性、少モ手垢ノ付又事タソ、落居、州ノ答処ハ、何上塵塵刹刹芭蕉雨、落落村村楊柳風、芭蕉ニ雨カ、サツトフリカカツタメテ、楊柳ニ風カ、ソヨト吹タ迄、州ノ心肝ニ委曲ノコカケナレハ、直指有リ目俣タソ、

(八境界註 卷下、47ウ、48ウ)

「為人」とは、凡聖迷悟の差別を捨遣して第一義(真理)をそのまま説くのではなく、第二義門に下つて、相手の機根に応じて、接化し、仏法を説くことをいう。

(図略)紫、為人、私云、為人トハ、仏法ニ儀アリ、第一義ハ、如レ常ノ図ハ、第二義ヲ示ス前タソ、教意テハ、大悲心ト云、教外テハ、為人ト云タソ、手ニ縦イ朽骨トナルトモ、魂ハ在君辺ニ、常ニ君ニツカウト云、此意也、亦、註ニ云、上根ハ上根ニ随ク、中根ハ中根ニ随イ、ソレタ々ニ接物利生スルカ、為人ノ底タソ、国師、又、註ミ、此段ハ大悲トモ云イ、為人トモ云タソ、亦ハ、自利利他円満位トモ云也、此人ハ、是非・得失・殺活ナドノ法儀ヲ、カラリト忘シテ、只寒夜ニハ紙頭巾、燂天ニハキレ団、何

威儀ニモカ、ラヌ人ニ打成テ御座有ルソ、歌云、兔毛角
 モ人ニ心ヲワタシ舟風ニ任セテ世ヲウタリケリト、家風
 更ニ僧俗ノワカチ無ク、庵室ノ定メナケレハ、樹下・石
 上ニナリトモ、卒度モ人ノ機カネナトヲスル人テ無ソ、
 サテ、図ニ棒ヲ二筋引タハ、短ハ所化機ヲ表シ、長ハ能化、
 大悲ノ腰ノ傾ケヨウタソ、ホトニ、此ノ図ハ、能所二ツ
 ヲ表シタソ、又、一義ニ、商量ノ取扱、第一義ト、第二
 義ニ、ルト云コト力有ルソ、第一義ノ時ハ、生仏迷悟ヲ、
 クツト見弘タ処ニ、第二義門ト下タ時ハ智慧ゲナ間マ、クツ
 トスリ尽シ、愚癡愚癡ト成テ、嬰兒ノナキラスカシ、魚
 人漁人ノ類ニ、ノウ能ク心ヲクスクニモタシマセ、後
 世ヲヨクネガワシマセ、ト勸マ、令ニ成仏タ事チヤソ、呈
 二、筋ヲ二ツ置タソ、サテ、紫ノ字ヲ置タハ、紫ヲ大悲ニ
 取ル故ニ、為人ノ処ニ、紫ノ字ヲ置タソ、意ハ、人天成仏
 ノ瑞相ニ取ルソ、釈尊御誕生ナサレテ、紫磨金色ヲ現シ
 テ、衆生ヲ度シテ、成仏サセシメタソ、又、一義ニ、紫ハ
 五色ノ体タソ、黒ニモツカズ、赤ニモツカヌ色タソ、畢竟
 青トモ黒トモキワマラヌハ、能所不二ノ処ヨ、

(八境界註 卷下、51ウ、52ウ)

「機」は、機関ともいい、機が発する処、その源は本分
 あるが、師家が学人を接化するに際して棒喝等（大機大用）
 を用いたりすることをいい、時に学人の立場を根底から否定

中世林下における語録抄と密参録について（上）（飯塚）

し（把住）、時に学人の力を見届けようとする（放行）、接化
 の自在なありかたをいう。

（図略）碧、機関、私云、教外意ハ、機・賊ノ扱力有ル
 ソ、機トハ、機ガイノハタラクヤウタソ、如何是機、代
 云、眼似流星ニ、機如製電、ソコハ、チツトモ委曲ノ無
 イ事ソ、亦註云、曹洞ニ、機関ト性ト三関ノ扱有リ、機ト
 ハ、大機大用現前ノ振舞マ、衲僧ノ眼裏タソ、如何是機、
 代云、石火光中ニ定命脈、国師、又、註ニ、機ト者、靈
 利性相ノ漢ト云也、於機ニ有種種ノ機、碧岩ニハ、百二十
 ノ漢ヲ拏マ、一一ノ機ヲ分テ有リ、然ハ、漢ト云モ、機ト云
 モ、同シ事也、故ニ、或ハ鈍癡漢トモ云イ、或ハ担板漢トモ
 云也、サテ、爰ノ機ト云ハ、其様マ、又カツタ機テハ無
 イ、何ニモハバヤイ、天上云ヘバ、地ト心得、地ノ処マ、天
 ノ事ヲハタラク処ノ靈利ノ漢タソ、此人ノ事ヨ、眼似ト
 電怪ニ云テ、眼指ノハヤイ事、星ナドノ流ル、如クタソ、
 機製電ト云テ、イナヒカリナトノ如ク、ツツドハバヤイ
 機ニシマ、トコニモ腰ヲスエヌソ、サテ、ハハヤイ処ノ靈
 利テハ無イカ、サテ、碧ノ字ヲ置タハ、碧ハミドリト詠
 字也、岩石ナトニ、イカニモ青青トシミドリノ体ハ、人天、
 八万手足ノカヨワヌ処、人跡不通ノ住ソ、其ヨハ、靈利性
 相ノ機ト云テ、ナントモ人天ノ眼力及ヌ処ソ、呈マ、爰テ、
 碧ノ字ヲ書タハ、大切不通ノ処ニ、青青トシテ有処ノミト

リノ事タソ、サテ、圖四角ニシテ、中二棒ヲ五節引タハ、五位ヲ表タソ、五位ト云ハ、大極・一易・二義・四相・八卦ノ五位ソ、何ニトシテ、是ヲ機ノ処ニ当タソ、此五位ト云ハ、天地陰陽、四方四維ヲアラワシタ物タソ、此五位ヲ靈利ノ漢ナレハ、只一目ニ見ナカシ、一足ニ踏ツメタ、イカニモハバヤイ処ノ機ソ、呈ニ、五位ノ表示ヲ、此圖ニ置タソ、

〔八境界註〕 卷下 60才 61才

「賊」は、機關同様に一機のはたらきであるが、一般的な言辭、措定に対する反措定であり、僧を俗と呼んだり、俗を僧と呼称するよつな、常識的な枠組みを否定する、順逆で言えは、逆の立場である。

「性」とは、本分の事であり、山は高く海は深く、柳の緑りに萌え花は紅いに咲くよつに、ありのままの姿が真理を體現していることを言つ。

五、『臨濟録抄』について

石川力山氏によれば、洞門抄物は、(一)語録抄(聞書抄)、(二)代語(代・下語・著語)、(三)代語抄・再吟、(四)門參(本參・秘參・伝參・秘書)、(四)切紙(断紙)の五種に分類されるという。語録抄についてであるが、これは『碧巖録』『無門関』等、禅籍に対する注釈であり、その文体から漢文

抄と仮名抄の二種がある。仮名抄は、原初的、本来的には師家の提唱を会下の聴衆がそのまま聞き書きした記録である。したがって、それはしばしば、その地方の俗語・口語で語られたものがそのまま記録されることとなり、これが国語学の分野において研究が先行する要因ともなった。

その語録抄の典型的なもの一つに、遠江一雲斎の開山川僧慧濟(一四〇九〜一四七五)が、文明三年(一四七二)十月十五日から文明五年(一四七三)六月十九日にかけて行った提唱の記録である、『人天眼目抄』が現存する。室町時代後期に成立した聞書抄(語録抄)は、夏・冬安居中に継続的に講義された提唱の記録と考えられる。地方に展開した林下諸派にとって、このような禅籍を中心とする講義は、清規にもとづく修行の一環として位置づけられていた。それは、江戸時代中期に活躍した学僧無著道忠においても同様であったと思われる。『大慈禅師書栲栳珠補遺』には、以下のように見える。

大慈書評唱寛保二壬戌(一七四二)十月六日開筵。

六日、自「題號」曾侍郎問書評了、聽衆六十二人。

七日、自「答書」初一到三張右七行能聽衆七十六人。

八日、自「同文殊」ト云到四張左八行能聽衆七十九人。

九日、自四文右「嚴頭」二到七文右參不得八行聽衆七十人。

三人。

十日、自七左 八行 雲門二到一、九左 理會否二、聽衆八十人。

十一日、自九左 三行 承論二到二、十一左 處也、聽衆七十七人。

十二日、休講。

十三日、自十一左 七行 答季云云二到二、十四右 是事、聽衆八十一人。

十四日、自十四左 二行 亦那比二到二、十六左 綾纒二、聽衆七十六人。

十五日、自十六左 三行 到、十八左 富樫密一書了火、聽衆七十一人。

十六日、自十八左 九行 富第一之書了火、聽衆八十二人。

十七日、自廿二左 二行 到、廿四左 別紙上与 書了、聽取七十九人。

十八日、自廿五左 二行 到、廿七左 陳少卿 二種待制 書了、聽衆七十八人。

十九日、休講。

廿日、自廿七左 七行 到、廿九右 許司理 書了、聽衆七十六人。

廿一日、自廿七右 七行 況此二到二、卅二左 絶到也二、聽衆七十五人。

廿二日、自卅五左 十行 到、卅九右 彦冲力二書了、聽衆七十九人。

中世林下における語録抄と密參録について(上)(飯塚)

廿三日、自卅五左 十行 到、卅七左 記取、聽衆七十八人。

廿四日、自卅七左 十行 到二、卅九左 張提刑書了二、聽衆八十人。

廿五日、自四十左 到、四十四右 汪内翰二了、聽衆七十八人。

廿六日、自四十四左 八行 伏承二到二、四十七左 破矣、聽衆七十八人。

廿七日、自四十七左 七行 前此二到二、五十左 書了二、聽衆九十三人。

廿八日、自五十左 九行 到、五十四右 吳景人 一書了、聽衆七十三人。

廿九日、自五十四右 五到、五十六右 汪狀元二書了、聽衆八十三人。

晦日、休講。

十一月朔日、自五十六右 十行 到、五十九右 宗重閣 評了、聽衆七十八人。

二日、自五十九右 十行 到、六十二左 曾宗丞、王教 評了、八十二人。

三日、自六十二左 十行 到、六十五左 授・劉侍郎 顛倒一評唱了、八十三人。

四日、自六十五左 六行 到、六十七左 祝祝、聽衆八十六人。

五日、休講。

六日、自六十七左 三行 到、七十右 黃知縣、七十三左 評唱了、聽衆六十八人。

七日、自七十文 右四行 到七十二 張待部・徐顯 左二行 讀・楊教授 評唱了、聽衆七十人。

八日、自七十二 左三行 到七十五 右六行 透脱矣評唱了、聽衆六十人。

九日、自七十五 有六行 七十八 有四行 然第一一到二 有七行、聽衆七十四人。

十日、自有六行 有四行 示論到八十文 右七行 數墨者、聽衆六十七人。

十一日、休講、法皇御忌。

十二日、休講、開山半齋。

十三日、休講、龜年忌、常住總評。

十四日、自八十文 左七行 到八十二 左九行 孫知縣書了、聽衆八十一人。

十五日、自八十二 左七行 到八十五 左九行 冷煖自知、聽衆七十六人。

十六日、休講、勝林菴有齋轉位開、常住總評。

十七日、自八十五 左二行 南陽到八十五 左九行 宗旨耳、聽衆六十九人。

十八日、自八十七 左九行 到八十九 左九行 題語、聽衆八十三人。

寬保壬戌應_二東林院下活首座_一請_二、評唱十月六日開筵、到_二十一月十八日_一畢_レ事。

散筵漫_二打_二拙偶一章_一、奉_レ謝_二衆聽_一。

爛_二嚼他ノ無義味ノ禪_一、長書_二緝_レ卷涉_二言詮_一。

梅陽ノ風月平分_レ得_ルモ、未_レ免_レ切_レ切_レトシテ玷キツ、ケルコトヲ、_二法筵_一。これによつて、道忠による『大慧書』講義の進度や、聽衆の規模がわかる。

次ぎに、大徳寺派における『臨濟録抄』についてみてみたい。『自戒集』には、養叟宗願による『臨濟録』講義の記事が見える。

贈養叟弟子比丘尼知識

頤八養叟諱也。子ト八弟子也。養叟力弟子ノ比丘尼、得法タテラシテモノ比丘尼ヲ接得ス。推參法物人コ

レヲニクム。此ノ比丘尼入室ヲヲコナウ。

頤子比丘尼知識、同參接得入室中。

竹篋俄無欲欠事、拈起三尺鉢實洪。

鉢實トハスリコキナリ。

題臨濟錄談義五首

敵身方叢林僧終、參逢面素兩會中。

風流美尼開納蘗、談義歸路猶猶洪。

猿樂田樂クセマイナントノヤウナルモノコソ、大名ニ

ランメヲカケラレテセニマウケタルヲハ高名ニス

レ、ソレホトニ物ヲハシシラヌソ。サスカニ面々ハ皆

叢林僧ノハテニテアルカ。養叟去十二日臨濟ノ録ノ談

義ニ、臨濟ノ録ニ、曾向毘尼中留心、毘尼八戒也ト云

ヲ、アル僧聞テ、アマニカイト云フ字ソウホトニワラ
イ出ツ。此程ハ比丘尼ノ沙汰アレハ、養叟ノ事ヲ云イ
タサヌ者ハナシ。美尼ハ毘尼ノ音ヲ借用ス。戒納ハ開
兄ノ納豆也。

禅話虫織多雜説、古事畧引皆推中。

昆布山椒尼養叟、恰好茶子人笑洪。

御寺エマイレハ昆布ニ山椒ヨイ茶ハノムカ、キテン談
義ハチャウモンスルカト、京ワランヘノ小ウタナリ。

又、比丘尼との關係を擲論されているのは、春浦も同様で
ある。春浦と尼五山との關係は、以前に簡単に触れたことが
あるのでここでは割愛する。

寄照首座 此照首座參學講ヲ結テ比丘尼寺ヲマワ

リテ得法ヲヲシユ。トウニンハヒロヲヒミスチ扇子二本
ヲ知識ノ布施ニスト也。文字ハ一文不通、道眼ハメクラ
ニテ、欲心フカク名聞多シテ畜生ノ如シ。詩文ノ學問ヲ
モシタラハ、文字ノウエニテモ此レ程理ヲハシルヘキカ、
根ヘシノ故也。

養叟、春浦と比丘尼五山との關係は、密接なものであつた
と思われ、彼らが大徳寺主流派を形成していく上でも大きな
意味を持ったものと思われるが、この点については別稿をも
つて實を果たしたいと思つている。既に紙数も尽きているの
で、対照表(一)として、大徳寺派の四種の『臨濟録抄』に

ついで、対照表(二)として、大徳寺派の語録抄の影響を受
けていると思われる幻住派の『臨濟録抄』を取り上げた。
これらの諸本については次稿において考察する予定である。¹⁵⁾

(一) 『臨濟錄抄』四本対照表

<p>駒澤大学蔵『臨濟録養叟抄』 師晚參示衆^{レシ}云々、晚參ト 云ハ、必在晡時、々々ハ、 申刻也、住持ノ隙ノ時^ニ及昏 鐘スルヲ、謂之小參、故^ニ家 訓・家教^ヲ示ソ、坐參トハ、 毎日放參以前^ニ坐以待^レ參、謂 ^ニ之坐參^ト、放參トハ、学者 ノ^{キチ}休屈ヲ為^レ延子ヤ、謂^ニ之放 參也、何モ清規^ニ詳也、 有時專人不專境、有時專境不 專人、有時人境俱專、有時人 境俱不專、 林際ノ孫弟子南院惠顯ノ時^ニ曰 リ、是ヲ(67頁)林際四料簡 ト号ス、言ハ、人力皆人境 ノ惑ヲ受ルホト^ニ、人境ノ惑 ヲウケサセマイトテ、料簡シ テ云タ、是ハ、紙衣道者^ニ林 際ノ示サレタ、克符道者トモ</p>	<p>松ケ岡文庫蔵『臨濟録一凍抄』 師晚參示衆云、 晚參トハ、小參ノ事也、晚景 二參ニアカルヲ云、</p>	<p>松ケ岡文庫蔵『臨濟録澤庵抄』 師晚參示衆云、 晚參ハ、謂^レフ在^ニ放參之先^ニ、 放參者、始^ニ慈明^ト、晚參・小 參相同シ、清規云、凡集^レテ衆 開示、皆謂^ニ之參^ト、古人匡^レ 徒^ヲ、使^ニ之^ヲ朝夕^ニ咨扣^セ、 無^四時^トシテ而不^三ト^テ激^ニ揚^セ此道 ^一ヲ、故每晚如參故^ニ云、晚 參則在晡時、至^レ今叢林坐參、 猶如^ニ巨望五參陞座、如住持 入院、或官員檀越入山、或受 ^ニ人ノ特請^一、或為亡者開示、 或四節ノ騰^ニ二八^ト、則移^ニ於昏鐘 鳴而謂之參、或曰家教、或曰 家訓、又曰、暗号初無定所、 看衆多少、或就寢堂、或就^ニ 法堂^ニ、至^ニ日午後^ニ、侍者 報^ニシテ住持^一、掛^{シム}小參牌、 由之晚參ト云、東山暗号、</p>	<p>京都大学文学部図書館所蔵『臨濟録抄』</p>
--	--	--	---------------------------

云ソ、先師ノ沙汰ニモ、殊勝ニ
ハアレトモ、林際分上テハ、
マツト墮落シタ、言ハ、餘ニ
漏逗シタ、花叟、四料簡ヲ能
ク用タラハ、著々有出身路ト
云々、又、晚參ト參字ハマシ
ハルト云、廣大ノ義ソ、マイ
ルト云義テハナイ、師家タル
者ハ、王侯・貴人・道俗・男
女兒・聲聞兒ヲモ不擇、參ヲ
サスル物チヤ、佛ノ時モ、一
切衆生ヲ進テサセラレタ、參
禪ハ、我ト發起セイテハナラ
又事ソ、師家カラストメタ
テトセヨト八言又物チヤ、奪
人ト云タハ、人八人々ニ身ノ
コトチヤ、境ト云ハ、色身ノ
上ニアル一切ノ事ソ、是ヲ一
方、奪ハ大事モ無イト云ソ、
其謂ハ、油火ハ灯心ニヨリテ
モヘ、又灯心ナクハ、火ハモ
ヘマイソ、人境ノ合スル処テ、

或人云、小參ヲ云也、五祖山
ヲ東山ト云、愚謂工アク、忝
力六韜・黄石三略及ヒ吳起等
力所造之、暗号、陰符之書、
是皆兵書之秘術也、韜・暗・
陰等ノ字ノ心ハ、隱又義也、
秘傳・秘訣等之謂也、濟下之
佛法、無レ不_三秘曲密旨_一、借
用称暗号也、予嘗詰一二之
禪宿其說一、不詳故書愚意以
明識矣、師初至_三河北住院_一、
見_三普ト克符二上座_一、乃
謂_テ曰、我欲_ニ於_レ此建_ニ立黃
檗_ノ宗旨_一、汝等且成_ニ禪_ヲ我_一、
二人珍重_{シテ}下去、三日ノ後、
普化却上来問、禾上三日ノ前
說甚麼、師便打、又三日ノ後、
克符来問、和尚前日打令_ニ普
化_一作什麼、師亦打、此時至_ニ
晚四料簡_ヲ、一上坐問_ニ向說
故_ニ、有僧問_トハ、克符ノ問也、

生死二沈淪スルソ、經三七如三
薪尽キ火滅ト説レタ、見月見
花テモ、面(68頁)白トハカ
リ見ハ、境ノ感ヲ受タ物ヨ、

有時奪人不奪境、有時奪境不
奪人、有時人境俱奪、有時人
境俱不奪、

又舞猿樂ヲキ、見テモ、面白
トハカリ思ワハ、人ノ感ヲ受
タル物ヨ、奪境不奪人ト云タ
モ、同事ソ、人境俱奪、是ハ

有時奪人不奪境、有時奪境不
奪人、有時人境俱奪、有時人
境俱不奪、
人ト境トニ、可下語、奪ト不
奪ト、可弁

殘ル処モナイ、人境俱奪トテ、
無心無念ニシテ枯木ノ如クニ
成テ居ヨト云事テハ無イ、受
用スル事チヤ、人境ヲ打ノク
ル理ゾ、今世間ニ參禪シタ者

八、ナニヲモ放下シテ、如枯
木トナツテ居ルナント云、ヨ
カシイコトソ、釈迦・達磨テ
モアレ、色身ノアル間ハ、世
間ニ可有様ヨ、悟徹ノ後ハ、
イカニモ世情ノ可有様ニ、身
ヲ持ヘキソ、人境俱不奪トハ、
如此用了テハ、人境ノ感ヲウ
ケタリ共、クルシカルマイ、

ハ、ナニヲモ放下シテ、如枯
木トナツテ居ルナント云、ヨ
カシイコトソ、釈迦・達磨テ
モアレ、色身ノアル間ハ、世
間ニ可有様ヨ、悟徹ノ後ハ、
イカニモ世情ノ可有様ニ、身
ヲ持ヘキソ、人境俱不奪トハ、
如此用了テハ、人境ノ感ヲウ
ケタリ共、クルシカルマイ、

有時奪人不奪境、有時奪境不
奪人、有時人境俱奪、有時人
境俱不奪、

ハ、ナニヲモ放下シテ、如枯
木トナツテ居ルナント云、ヨ
カシイコトソ、釈迦・達磨テ
モアレ、色身ノアル間ハ、世
間ニ可有様ヨ、悟徹ノ後ハ、
イカニモ世情ノ可有様ニ、身
ヲ持ヘキソ、人境俱不奪トハ、
如此用了テハ、人境ノ感ヲウ
ケタリ共、クルシカルマイ、

有時奪人不奪境、有時奪境不
奪人、有時人境俱奪、有時人
境俱不奪、

ハ、ナニヲモ放下シテ、如枯
木トナツテ居ルナント云、ヨ
カシイコトソ、釈迦・達磨テ
モアレ、色身ノアル間ハ、世
間ニ可有様ヨ、悟徹ノ後ハ、
イカニモ世情ノ可有様ニ、身
ヲ持ヘキソ、人境俱不奪トハ、
如此用了テハ、人境ノ感ヲウ
ケタリ共、クルシカルマイ、

有時奪人不奪境、有時奪境不
奪人、有時人境俱奪、有時人
境俱不奪、

晩參示衆云、有時八奪人不奪
境、有時奪境不奪人、有時人
境俱奪、有時人境俱不奪、
晩參ハ、小參ト一般也、勅修
清規云、凡集レ衆開示スル、
皆是ヲ曰レ參ト、コレハ、臨
濟ノ四料揀ト云テ、名譽ノ則
參得ノ処、料ノ字ノ心ハ、説
文ニ料也、廣韻ニハ、廣也、
理也、揀ハ、分別也、決断也
選也、簡ト同、事理ノニツヲ
以テ、學者ヲ接スル也、事理
ノニツハ、何時モ、現成本分
也、涅槃經ニモ、四料揀ノ事
アリ、法眼宗ニモ、詔國師ノ
四料揀アリ、人天眼目ニ、子
ンコロニアリ、小參ハ、法堂
ニテスル物也、サレトモ、上
堂ニハ不似、椅子ヲ立テ、ス
ル也、或ハ此則ヲ、林際ノ四
料揀ト云ハ、大惠也、豈劣ニ
料揀・思量・造作・建立ニ

悟了同未悟、飯家尋旧路ト云
夕、皆林際ノ著語ヲ聞ヘ夕、

時有僧問、如何是奪人不奪境、
師云、煦日發生鋪地錦、櫻孩
垂髮白如絲、

煦日ハ、春ノ日チヤ、發生ハ、
草木ノ秀ナリ、花ノサキ乱夕
力如錦ナト云夕、是ハ境ヲ奪
又、櫻孫ノ髮白ナツ夕ハ、奪
人者ヨ、(69頁) 五歳六歳ニ
ナル者力、ナセニ髮力白カラ
ン、大灯下語、貧兒思旧債、

時有僧問、如何是奪人不奪境、
是ヲ四料簡ト云リ、師ノ孫弟
子南院(22ウ)ノ時ヨリ四料
簡ト名ク、人ハ、人境ニ惑セ
ラル、者也、故人境ノ惑ヲ受
サラシメンカ為ニ、料簡シテ
云タル事也、師云、煦日發生
鋪地錦、
不奪境ノ処也、煦日トハ、春
日也、發生ハ、日出兒也、錦
ハ、花柳ナントヲ云、櫻孩垂
髮白如絲、
奪人ノ処也、生タル小兒ノ白
髮ナルト云夕ハ、ナキ事
也、櫻、音櫻、孩ハ、胡來
切、稚也、

時有僧問、如何是奪人不奪境、
下語スヘシ、傳灯云、紙衣未
上ノ問也、人天眼目ニハ、作
克符、即紙衣和上也、又見
二會元十一一云、四料簡者、
河北住院ニシテ、克符道者之
問也、又号紙衣道者、四料簡
ト名クル事ハ、師ノ孫南院之
時、始名、料ハ、量ル也、即
別ノ義也、四料簡ノ本意ハ、
人ハ依レ被ニルニ人境ノ惑、預ニカ
生死輪廻ニ也、故為斷ニ人境
之惑、令レ免中輪廻上マ、之
料簡問也、南浦云、四料簡ハ、
殊勝サハ尤殊勝也、雖然、至
ニ林才面前、則墮落之語也、
サレトモ、不參ニ四料簡、則
禪僧トハ云ヘカラス、又大燈

四料揀ト云ハ、活ニ埋林際ヲ
シタモノソ、只林際四種ノ境
ト云ヘシ、

時有僧問、如何是奪人不奪境、
此僧ハ、克符也、紙衣道者ト
云夕人ソ、嗣林際也、人トハ、
人々具足、个々圓成ノ主人公
也、境トハ、山河大地、牆壁
瓦礫、對六根六境也、後人名
為四料揀、甚鈍ニ置林際者也、
師ハ、只向石火電光之中、拳
一機一境之事耳、豈勞ニ料
揀・思量・造作・建立ニ、又
云、四種語者、次第階級也、
徒以己見破滅吾个端的直指、
一山云、彼四料揀者、不得レ
已ト云、而慈悲之語也、高著眼
看、則可知林際也、今墮權教
之位者、或以台教三諦配四種
可笑、四種ハ各電飛量較底之
機變、才ニ作ニ計較、万里崖

云、四料簡ハ殊勝サハ殊勝也、サレトモ、至下テハ不レ用ニ人境一ヲ底之衲僧面前上ニ、則少シ林オノ不足ニテカ、アランスラウト、ヲセラル、花叟禾上云、人境ヲ捨ヘシ、人境ヲ捨得タハ、到處著力アルヘシ、私、人境ヲ捨ルカ、人境ヲ用ル也、此語葦ニケリ于闐師ニ、大用先師金口之説ト云也、又、先師曰、四料簡ハ、句ヲ下スコトハ、林オノ下語ヲイカタニスルホトニ、ヤスシ、心得ル事力大事也ト、師云、煦日發生鋪レク地ニ錦、櫻孩垂レテ髪ヲ白如レシ絲、煦日ハ、暖日也、發生ハ、日出兒也、煦日發生鋪地錦者、不奪境兒也、櫻孩垂髮白如絲者、奪人兒也、非人也、玉也言ハ、煦日ト、春ノ日發生ル時分ニ、万木花開キ乱タルハ、サナ州、教家ニ能化所化ト云ハ、宗門ノ師学ト云カ如シ、能化・所化ト云ハ、宗門ノ師学ト云カ如シ、能ク化シ、所化セナリ

師云、煦日發生シテ鋪レク地ニ錦言ハ、コレハ、不奪境チヤ、煦日ハ、暖日也、春日チヤ、説文ニ、日出テ、温也、發生ハ、日出兒也、鋪レク地ニ錦シキハ、日ノ光、草木ニ映スル体、春ナトノ花チヤ、煦ハ、坑羽切、日出温也、礼記注曰、以氣曰煦、櫻孩垂髮白如レシ絲、コレハ、奪人也、白如絲ハ、白髮ノ方人ハ、イキカイハナイ底ソ、惣別コノ煦境也、日ノ句ハ、櫻孩、ノ下ニアリサウナ、大惠云、此兩句、一句ハ存レ境、一句奪レ人也、櫻孩ナラハ、緑髮テコソアラウニ、白髮ト云ハ、奪タ

僧云、如何是奪境不奪人、師云、王令已行天下遍、將軍塞外絶烟塵、王令已、天子ノ政ヲタシク行テ、人民尽ク化服シタハ、人ヲ奪ヌ方ソ、將軍塞外ハ、洛中ノ外ト云義ソ、五畿内ト云義ソ、人天眼目ニ、襄中天子勅、塞外將軍令、襄中ハ、洛中ノ事チヤ、洛中ハ天子ノハカライ、塞外ハ將軍ノハカライチヤ、烟塵トハ、狼烟ノコトソ、狼ノ糞ヲ焼ク烟ハ、風力吹ハ、空ヘ直ニアカル、大唐ニハ、集狼糞、冠力出来スレハ、焼之、又、烟塵トハ、人馬ノホコリ

僧云、如何是奪境不奪人、師云、王令已行天下遍、不奪人ノ処ナリ、天下政ヲ行テ、人民尽ク服服シタルナリ、將軍塞外絶烟塵、奪レ境ヲタル処也、將軍力合戦ヲシテ、尽クキリ平テ、アイツノ烟ヲ不レ立也、烟塵ハ、狼烟ヲ云、狼ノ糞ヲ焼ハ、烟力虚空ヘ直ニ上ル也、又ハ、烟塵(23才)ハ、人馬ノホコリヲ云ト一説、塞外、塞ハ隔也、他国也、異国ノ境也、僧云、如何是人境兩俱奪、師云、并汾絶信、独処一方、人境共ニ奪タル兒也、唐ノ時

カラ錦ヨト云也、又云、櫻孩垂髮、ト云ニ、童宝云、貧兒思旧債、又云、生レタル小児ノ白髮、ト云タハ、無キコト、

僧云、如何是奪境不奪人、下語スヘシ、師云、王令已行天下ニ遍シ、將軍塞外絶ニ烟塵ニマ、童宝云、胡僧坐ニ少林ニマ、王令ハ、王制也、マツリコト也、上ノ句、不奪人兒也、下之句、奪境兒也、絶ニ烟塵ニマ、是奪境也、塞外ハ、將軍ノ令ナル故也、烟塵者、狼烟也、積ニテ狼糞ニマ、寇至レハ則燃レテ之、以望ニマシム其烟、此烟直ニ昇昇マ、風雖レ吹ト不レ斜、或云、人馬ノホコリヲ云、言ハ、太平ノ時節、如レ此ノ烟塵ナシ、是レ境ヲ奪フ義也、塞ハ、隔也、

也、聯灯作白頭絲

僧云、如何是奪境不奪人、無別義、師云、王令已行天下ニ遍シ、將軍塞外ニ絶ニ烟塵ニマ、

王令、下ノ句ハ、不奪人ソ、王令力、天下ニ遍キホトニ、不奪人也、王カラ成敗ヲ加ヘラレテ、ヨク用也、今ハ、法度也、人ヲ存スルカタ、境ハ、一ツモナイソ、將軍、塵、武家ハコト々々ク、王令ニ奪ワレテ、塞外ニ塵リホコリモナイ、コレハ、奪境方チヤ、王ト將軍ハ、人也、天下ノ動乱ヲツメタハ、奪境チヤ、將軍力、天子ノ号令ヲ行マ、天

ヲ云義モアル、狼烟力好イ、言ハ、將軍ノ天下ヲキリタイラケテ、太平ノ時節テアルホトニ、狼烟モアカラヌト云々、是ハ境ヲ奪ヌカ、能ク境ヲ奪タ、大灯下語、胡僧坐少林、

僧云、如何是人境兩俱奪、師云、并汾絶信、独処一方、并汾絶信ハ、唐呉元済力、并州・汾州ノ兩國ヲ打把テ、朝廷ヘシタカワイテ、他国ヘ通路ヲヤメテ、城ヲコシラヘテ、懸瓠城ト云々、トツコヲサカサマニ立タ様ニアルト、名城ニテ、人カ力ヨハウスル様モナカツタ、マワリニ大ホリ力有タ、鷲鵝驚力下リテ有タ、或時李愬力猛勢ヲ以テ、鵝トモヲ一度ニ打タテタ、其羽ヲトニ驚テ、軍勢力セメタト思

呉元済ト云者、并州汾州ヲ奪取テ、天子ノ勅命ニシタカワスヲレリ、故絶信ト云リ、

僧云、如何是人境俱不奪、師云、王登寶殿、野老謳歌、人境俱不奪ノ兒、天子ハ内裡ニ御座アリ、政ヲ行ヘハ、土民百姓ハ、千秋万歳ト歌也、謳ハ、一度ニ声ヲソロヘテ歌フヲ云リ、南浦云、四料簡ハ、殊勝サハ殊勝也、サレトモ、臨濟ノ面前ニハ、墮落シタリ、アマリ念比ニ、ツハメヲ合テ云タル故ニ云リ、開山云、四料簡ヲ不レ用、衲僧面前ニハ、チツト臨濟ノ不足ニ力、ナリソウスラウト(23ウ)云

塞外ハ、異邦也、他邦也、異国ノ境也、^手言ハ、天下ニ徧ク用^{ニル}王ノ法令^ヲ也、襄中ト云ハ、畿内也、故襄中天子勅、塞外將軍令ト云也、大惠云、上句ハ奪境、下句存^レ人、

僧云、如何是人境兩俱奪、師云、并汾絶信、独処一方、古抄云、紀信ト云人曾領^{ニシテ}并汾ノ兩國^マ不朝^ニ咸陽^ニ秦ノ始皇卒^{レシ}兵^マ破^ニ并汾^ハ墮落紀信^マ々々後^ニ事^ニ高祖^ハ云々、此注非也、又、唐代^ニ呉元済居^ニ蔡州城^ニ押^ニ取^テ并汾^ノ二州^マ不^{レシ}隨^ニ天下^ニ而^モ此城高峻、人力難^ク及^ビ、時^ニ天大^ニ雪^ツ、与^レ城^ト齊^ク、即^チ打落^シ此城、々々兒如^ク懸^レ瓠^カ瓠^コマ、故曰^ク名懸瓠城^ト也、云々、作^レ漢高祖臣紀信^ト

下ヲシツメテ、絶^ニ烟塵^ヲハ、存^レ人也、万民力ヨロコウタヲ、又塞外ハ、境也、普天普地、君王ノ封疆也、ソレヲ、將軍力、絶^ニ烟塵^ハ、將軍力、王土ヲ奪^テ者也、

僧云、如何是人境兩俱奪、師云、并汾絶信、独^ニ處^ニ一方^ト、^{此城}是ハ、不通ノ用處、人境俱奪ノ當意チヤ、人モ境モ奪^テ、并汾絶信ハ、呉元済居^ニ蔡州城^ニ、押取^テ并汾^ノ二州^マ、不^レ隨^ニ天下^ニ而^モ不^レ通信、此城高聳空、難^ク到^リ故、不能攻破、時^ニ天大雪^ト与^レ城^ト齊^ク、此時^ニ李愬^ノ破^レ之、此城兒如^ク懸^レ瓠^カ、故曰^ク懸^レ瓠^カ城^ト、又以^テ二州^ト相望、成人境故、奪^テ也、見^ル唐書并柳文、大惠云、吾初讀^ニ諸家禪録^ニ、見^ル并汾絶信^ノ之語、深^ク以^テ疑、雖^シ詰^テ諸^ノ考、皆^モ含^シ糊^シ不

テ、俄力ニ城力落夕、并汾絶
信トハ、此事チヤ、又、此録
計ニ絶信トハアル、餘ノ録ニ
ハ、皆紀信トシルイタ、是ハ
人ノナチヤ、秦ノ時紀信ト云
者チヤ、領并汾ニ州、不隨始

皇、終始皇ノ并汾ヲ破テ、紀
信ヲ打夕、是ハ連夕、天下ノ
人力、紀信ト云ヲ難心得シテ、
含糊シタヲ、大惠禪師ノ見出
テ、絶信トナヲサレ夕、是ハ
并汾モ有一方、他国エノカヨ
イモ無ウテ、不通信ホトニ、
人境俱奪夕ハ、大灯下語、老
鼠引生婆、

僧云、如何是人境俱不奪、師
云、王登寶殿、野老謳歌、
是ハ、天子ハ大裏ニ御座アリ
テ、政ヲ行ヘハ、天下太平
ニテ、土民百姓ハ、目出度ト
テ、処々村々ニ歌イ酒モルソ、

リ、花叟和尚云、四料簡ヲ捨
ヘシ、四料簡ヲ捨タラハ、四
料簡ヲ用ヘシ、四料簡ヲ用ヒ
タラハ、到処ニ著力アルヘシ、
ト仰ラル、殊勝ニサウ、

ト謬也、絶信ヲ独処一方者、
各々ノ義、非ニ孤之義ニ
絶レ信而独リツ、処一方ニ
是人境俱奪也、此義好、
張九成一日問大惠曰、前輩既
ニ得了ス、何故理ニ會スルコト林才ノ
四料簡ニマ、則^{スレハチ}甚議論問ナリ、
惠曰、公之所見、只可レ入レ仏
不レ可レ入レ魔ニ、豈可^{トシヤ}不レ從
ニ料^{スツ}揀^ス中^ニ去^レト師マ、公遂ニ拳ス
克符問林才、至人境兩俱奪、
不レ覺ヘ欣然^{アリ}、惠曰、余則不
然、公曰、師意如何、惠云、
打破蔡州城、殺^ニ却吳元濟、
公於言下、得大自在、云々、

僧云、如何是人境俱不奪、師
云、王登寶殿、野老謳歌、
宝殿者、帝王太平樂ノ境也、
野老者、山野聚衆ニ樂テ太平ニマ
謳歌ス、人境俱不奪兒也、抄
云、野老者、田夫野人也、謳

弁、既闍林際語、則絶信ニ字、
蓋ニ州之名故也、詳首書

謳ノ字ハ、大勢聲ヲ音シ、口
ヲソ口ヘテウタウ(71頁)タ、
如此林際ノ一々語シタハ、人
境ノ二ツヲ、能ク諸人ニ心得
サセウトシタ、ナセニト謂ヘ
ハ、諸人カ人境ノ惑ヲ受ル程
ニ、人ハ色身ノ事チヤ、境ハ
耳ニキク、目ニ見ル事ソ、大
灯云、此四料簡ハ、林際ヨリ
上手ノ僧力有ラハ、林際ノ不
足ニナラウスルト云ニ、一々
下語シテナラテハ、難知ソ、
大灯下語、李廣射石虎、

ハ、音^{シテ}聲歌也、歌者、柯
也、樹梢ノ葉、相似^ク人ノ音^ニ
ニ、故^ニ云尔、^キ、王登宝殿、
野老謳歌、各得処俱不專義明
也、竜宝云、李廣射石虎、人
天眼目云、四料揀者、師初至
河北住院、見^ニ普化克符^ニ上
坐、乃謂曰、我欲^ニ於^レ此^ニ建^ニ
立^ニト黄檗ノ宗旨^ニマ、汝且成^ニ禪^ニ
我^ニマ、二人理^重下去、三日^ニ
シテ二人上来、皆被打、煦曰、
二句、大惠曰、大惠云、此兩
句、一句存^シ境、一句專人、
王令之^ニ二句、大惠曰、上句專
境、下句存人并汾之^ニ二句、大
惠曰、便有人境俱奪面目、王
登之^ニ二句、大惠曰、此是人境
俱不專也、大惠曰、吾初讀諸
家禪錄、見并汾紀信之語、深
以為疑、雖詰諸老、皆含糊不
辨、既閱林才語、則知^ニ絶信
ノ二字^{ナルコト}マ、蓋并汾ハ二州ノ

名也、僧問、人境兩俱奪、答曰、独処一方、其旨瞭然タリ、方ニ悟諸師之集、皆有烏焉之誤、私云、紀信八降ニ項王ニ者、為漢王被烹平、南院問風穴、四種料簡ノ語、料ニ簡何法一ヲタ、穴云、凡ソ語不レ滯凡聖ニ、即墮ニス聖解ニ、學者、大病ナリ、先聖哀之、為ニ施ニ方便一ヲ、如ニ楸出レ楸、院問、如何是奪人不奪境、穴云、新ニ出ニル紅炉一ヲ金彈子、筵ニ破闍梨一カ鐵面前一ヲ、院問、如何是奪境不奪人、穴云、芻草ヲ分頭腦裂、乱雲初綻テ影猶存ス、問、如何是人境俱奪、穴云、躡レシテ足進前須レ促レ鞭、(促、鞭、杖)當レテ鞅ニ莫ニ遲遲一タルコト、院問、如何是人境俱不奪、穴云、常憶江南三月裡、鷓鴣啼處百花香、

(二) 幻住派『臨濟錄抄』対照表

【尊經閣文庫所藏『臨濟錄抄』(洞春庵旧藏)】

晚參示衆云、

晚參ハ、申ノ刻ノ參也、晡時也、放參過テ在ヲ、小參ト云ソ、又、放參ヨリ先ニ在ヲ、坐參ト云ソ、僧堂ニ居テ、參ヲ待也、清規ニヨク在ソ、放參トハ、參ヲユルスソ、參カアマリ窮屈ナ程ニ、ソレヲユルス心ソ、仏祖ノ手段ガ別也、仏ノ參ヲユルスソ、時ハ、人ヲス、メテ、參ヲサセラル、ソ、達磨以來ハ、志ノアルモノヲ接スルソ、此ノ示衆ヲ四料簡ト云也、此レハ、林際ノ紙衣道者ニ就テ示サレタソ、又、四料簡トハ、後ニ南院ノ惠顛ノ名ヲ付テ置ク也、師在河北、對普化克符ニ上座(21才)説ケ也、大灯云、此古則ハ、林際ノ分上ハ、マチト墮落シタソ、參ノ字ハ、マイル心テハ無イ、マシワル義ソ、又ハ、大也、

會元十一云、涿州ノ紙衣和尚ハ、即克符道者也、四料簡ノ問ハ、即克符ノ問也、四料簡者、分別シテ揀フ云也、

紙衣和尚者、師初至河北ニ住持ス、見普化ト克符トノ上座、乃謂曰、我レ欲ニス於レ此ニ建ニ立黄檗ノ宗旨マ、汝二人可レ成ニ禪我ニマ、二人珍重シテ下去ル、三日ノ後、普化却上来問曰、和尚三日ノ前説甚麼、師便打、三日ノ後、克符上来問、和尚昨日打令、普化作甚麼、師亦打、至レテ晚、小參云レ、紙衣和上於

【松ヶ岡文庫所藏『臨濟錄抄』(クハ 四九四)】

師晚參示衆云、

晚參ハ、申ノ刻ノ參也、時也、放參スキテアルヨ、小參ト云ソ、又放參ヨリサキニ在ヲ、坐參ト云、僧堂ニ居テ、參ヲマツ也、清規ニヨクアルソ、放參トハ、參カアマリ(36ウ)キウ屈ナホトニ、ソレヲユルスソ、佛祖ノ手段ガ別也、仏ノ時ハ、人ヲス、メテ、參ヲサセラル、ソ、達磨以來ハ、志ノアル者ヲ接セラル、ソ、此ヲ四料簡ト云、四料簡トハ、後ニ南院顛ノ名ヲ付テヤク也、師在河北、對普化克符ニ上座説也、是ハ、林際ノ紙衣道者ニツイテ示サレタソ、參ノ字ハ、マイル心テハナイソ、マシハルソ、又ハ、大也、大灯云、此古則ハ、臨濟分上テハ、マチト墮落シタソ、

二言下^レ領旨^ヲ、後有^レ領曰^ク々、專^レ人不^レ專^レ境、緣八自帶^ニ論訛
一、擬^レハ欲^レト求^ニト玄旨^ヲ、思量^ノ反責^ノ麼、驪珠光^リ燦爛、蟻柱
影婆娑、觀面無^ニ差互^ニ、還^テ應^レ滯^ニ網羅^一、
晚參^トハ、慈明山行、方會^ニ其出易^ニ、雖^レ晚、擊^レ鼓集^レ衆、明
怒曰、少^ニ叢林^ニ專^テ而陞座、何從得^ニ此^ノ規繩^一、會曰々、汾陽ハ
晚參也、

有時專人

專^ハ、截斷^ノ方^ヲ、一方ヲタニモ截斷^{スレハ}、大事^モ無^ソ、灯心^ハア
レトモ、油^カナケレハ、不^レ燃^也、總^{シテ}人^カナクハ、境^モアル
マイ、境^ガナクハ、人^モアルマイソ、コ、ハ、衲僧^ノ用^イヲ云
ソ、

又抄云、晚參^ハ、小參^トモ、家訓^トモ云也、或^レ礼^ノ間^マ、參^{スル}モ在^リ、
或^ハ、法堂^マ、日本^ノ様^ニ、晚間^ニ小參^{スル}モ在^也、師^小參^ノ
悟^マ、克符^ノ四三分^マ、一々^ニ問^レ師[、]々有^ニ答話^一、自^レ此^ニ謂^ニ之^ヲ
四料^揀ト也、臨濟^ハ不^レ立^ニ此^ノ名[、]他^呼テ称^レ之^也、南院^別名^也、這上堂、
立^テ位^即當說、嫌^ニ其^ノ繞路^ニ也、サテ、四料^揀ハ、先^ツ專人
不^レ專境也、言^ハ、總^{シテ}世界^ハ、一切^只人^々、人々^被レル^ル惑也、人^ト
云^者々、(22才)對^ニシテ六根^{六塵}ニ、善惡^ノ念^カ起^テ、人^ヲ惑^ス也、サ
テ又、前境^カ出来^テ、其^ニ被^レ惑也、風花雪月^ニモ、山川草木^ニモ、
星辰禽獸^ニモ、被^レ惑^テハ、不^レ叶^者也、サル程^ニ、六根^{六塵}、
尽相對^{シテ}、互^ニミマトワサル^者也、サレドモ、人^カ有^テコソ、

有時專人不專境

總^{シテ}人^カナクハ、境^モアルマイ、境^カナクハ、人^モ在^マ
イソ、コ、ハ、衲僧^ノ用^イヲ云ソ、一方ヲタニモ截斷^{スレハ}、
大事^モナイソ、灯心^アレトモ、油^ナケレハ不^レ燃^也、

悟ル上云事モ、アラウスレ、六根ノ眼耳鼻舌身意力、人ニアレハ
コソ、見聞嗅味触マ、悟ル事モアレ、六根ハ、悪ミモナリ、善ミ
モ成ル也、有テモ悪キ者也、又、無テモナキ也、去程ミ、先專レ
テ人、六根門ヲ截断シテノケテ、無心ニシテ、對ニシテ無心ノ境ニ、悟
レト云心也、故ニ境ヲハ、不レ奪也、本無念無心ナル者也、故ニ法
尔トシテ、現成スル者也、其ノ上々々テ、悟レト云心也、奪人トハ、
奪ニ六根六識一ヲ也、

有時奪レ境

人境合スル時、生死ニ輪廻スル者ソ、去程ミ、花ヲ見、月ヲ見テモ、
面白イトハカリミテハ、受レタ惑ヲ者也、花ニミラレタ者ノ也、何レモ
著スルカ悪ソ、或抄云、奪レ境ヲ不レ奪レ人ヲトハ、ナニデマレ、
悪キ事ハ、前境ニ對シテ、起ル者也、山河大地、花鳥風月カ無ク
ハ、念モ起ルマシキ也、サル程ニ、染淨ノ二境、万般境ハ、本来
無ソト心得テ、奪テノクル処テ、悟ラシメウドテ、奪レ境ヲ立
レ人ヲ也、其ノ時ハ、人モ、六根六識マ、善ノ方ヘ運也、人ノ方ヲ
立テユルシ、立マ、前境ノ、本来高マ、悟レト云方也、
克符曰、奪境不奪人、專言何処眞、問レ禅々は妄、究レハ理々
非親、日照寒光澹、山遥翠色新、直饒玄ヲ會得スルモ、也是眼
中ノ塵、

有時人境

有時奪境不奪人

人境合スル時、生死ニ輪廻スル者ソ、去程ミ、花ヲ見テモ、
月ヲミテモ、面白トハカリミテハ、惑ヲ受タル者也、花ニミ
ラレタ者ソ、著スルガ悪ソ、(37才)

有時人境俱奪

是モ、只枯木ノゴトクニアレト云テハ無_ク、釈迦達磨モ無心無念_ナ処_ハ、則悟了同未悟ソ、是ハ、俱_ニ奪_ハ処_ハ、(23才)不_レ着_ニ人境_ニ方_マ、着_々出身ノ路アルヘシ也、或抄、人境俱奪_トハ、一向_ニ掃蕩_{スル}也、

克符云、人境兩俱奪、從來正令行_ス、不_レ論_ニ佛_与レ祖、那_ソ說_ニ聖凡情_、擬_レ犯_ニ吹毛_ノ劍_、還如_ニ值_レ木盲_、進前求_ニ解會_、特地斬_ニ精靈_マ、張九成一日問大惠曰、前輩既_ニ得了_ル、何故理_ニ會_ニ臨濟_ノ四料揀_、則_ニ甚_ニ議論_{シテ}問_{ンヤ}、惠曰、公_ノ所_レ見、只可_レ入_レ佛_ニハ、不_レ可_レ入_レ魔_ニハ、豈_ニ可_レ不_レ從_ニ料揀_ノ中_ニ去_レ耶、公遂_ニ攀_下克符問_ニ臨濟_ニ、至_ニ人境兩俱奪_ニ、不_レ覺_ニ欣然_ト、_ト公_ト曰、余則不_レ然、公曰、師ノ意如何、惠曰、打_ニ破_{シテ}蔡州城_マ、殺_ニ却_レ吳元濟_マ、公於_ニ言_下、得_ニ大自在_マ、

有時人 不奪、

不奪_トハ、一度奪_テ後_ハ、不_レ奪_トモ大事_モ無_ソ、人境共_ニ無_物ソ、總_{シテ}師家_ハ、根本_ヲコソ知_レ、色身_ノ上_ハ、知_レヌモノソ、人境共_ニ奪_ヲウトモ、奪_ヲマイトモ俛_ソ、人境俱不_レ奪、一向_ニ立_スル也、建立門也、克符云、人境俱不奪、思量還不_レ偏、主實言不異、問答理俱全_ク、踏_ニ破_シ澄潭_ノ月_マ、穿_ニ開_レ碧落_ノ天_マ、不_レ能_レ明_ニ妙用_、淪溺_在無_縁、

着_ニ出身ノ路アルヘシ、是モ只枯木如_ニアレテハナイソ、釈迦達磨モ无_心念_ナ処、則悟了同未悟ソ、

有時人境俱不奪、

一度奪_テ後_ハ、不奪_トモ大事_{ナイ}ソ、總_{シテ}師家_ハ、根本_ヲコソシレ、色身_ノ上_ハ、知_ヌ者_ソ、人境共_ニ奪_ヲウトモ、奪_ヲマイトモマ、也、

時有僧問、

此僧ハ、克符也、好問処ヲ問々、着語ヲ看ヨ、

師云、照日照日也、

照日ハ、春日也、又義ニハ、日ノ出ル兒也、發生ハ、草木紅白如錦也ノサキ乱

夕体也、鋪地ハ、春日力、草木ノ滿地花ニ相映シテ、紅ナルコト

如レ錦也、是ハ、境ヲ立テ不レ奪方也、

裸孩垂髮白如絲トハ、

四ツ五ツノ子ハ、頭ハ白ハアルマイ、是ハ無イ事ヲ云タ程ニ、(24才)

人ヲ奪タソ、大恵云、此ノ兩句ハ、一句ハ存レ境、一句ハ奪レ人也、

僧云、如何、奪境、師云、王令、

此ハ、天子ノ政ヲ正シウシテ、天下ガ一統ニ用ゾ、是ハ、不レ奪レ人

ヲ方ソ將軍

塞外ハ、洛外也、煙塵ハ、狼煙ソ、積狼糞、寇至レハ燒之也、

其煙直ニ昇テ、風吹トモ、ユガマ又烟也、又ハ、人馬ノホコリ

ヲ云也、言ハ、天下太平チャ程ニ、塞外マテ、烟塵ガナイソ、

冤來燒之、狼烟ヲ絶也、絶字ヲ奪レ境方ソ、

王者行令ハ、立レ人方ソ、塞外ニ絶レ烟塵一ヨハ、境ハ混絶シタル也、

王者ノ号令徧ク行テ天下ニ、々々大平ナル程ニ、將軍モ塞外絶ニ烟

塵ヲソ、狼烟ハ、兵者ノ烽火也、国乱則ハ、狼烟不レ断起也、

絶則ハ、太平ノ故ニ不レ起也、是奪境不奪人也、(24ウ)又、

王令ハ、王制也、塞者ハ、隔也、塞外者ハ、異国ノ境也、襄中ハ、

畿内也、大恵云、上句ハ奪レ境ヲ、下句ハ存レ人ヲ、絶ニハ烟塵

時有僧問、如何是奪人不奪境、師云、照日發生鋪地錦、

師云、照日、春日也、

又義ニ、日出兒也、發生ハ、艸木ノサキ乱夕体也、コレハ、

境ヲ奪又心ソ、

裸孩垂髮白如絲、

四ツ五ツノ子ハ、頭ハ白コトハ在マイ、是ハナイタコトヨ

云タ程ニ、人ヲ奪タソ、

僧云、師云、王令己行天下徧、

此ハ、天子ノ政ヲ正シウシテ、天下力等シク用タソ、人ヲ

奪又方ソ、物ヲソタテタ(37ウ)ホトニソ、

將軍塞外絶煙塵、

塞外ハ、洛外也、煙塵ハ、狼煙ソ、積狼糞寇至燒之也、其

煙直ニ昇テ、風吹トモユガマ又也、又ハ、人事ノホコリ也、

天下太平シヤホトニ、塞外マテニ、煙塵力ナイソ、冤來燒之

チャソ、境ヲ奪タ方ソ、

一、狼烟也、積^レ狼糞^一マ、寇^{コウ}至^ルハ則燃^ス、以^テ望^ニ無烟、々直上^マ風吹^{トモ}不^レ斜^也、

或云、馬ノホコリヲ云也、言ハ、太平ノ時節、無^ニ如^レ此烟塵^一、是^レ奪^レ境^不奪^レ人^ノ之^義也、

僧云、如何是人境兩[、]師云、并汾絶信獨處一方、華叟云、此話ハ、句々有^ニ出身^ノ處^也、トコ力出身[、]受別傳ハ、四国ヘヒツコミテ居シタ人也、死時、并汾絶^レ信^{トモ}死也、人境俱奪也、是便辭世ノ頌也、

并汾ハ、此吳元濟カ故事也、并汾ハ、二州名也、并与汾之中^ニ有^ニ蔡州^一、々々ハ、吳元濟所^レ構^ル城也、又号^ニ懸瓠城^一、諸州逼蔡不降、故(25才)并汾絶^レ信^ヲ後^ニ、以^テ李愬カ謀^一マ、雪夜^ニ降^レス之^マ、蔡州^ノ之側多^ニ沼湫^一、鵝鳧^ノ相集^ル、李愬^ノ夜驚^ニ彼^ノ鵝鳧^一マ、鳴聲^ノ中^ニ、降^ニ蔡州^一城^マ、コレハ、始皇^ニシタガハナンタ者^ソ、茲^ノ言ハ、一方々々、并州毛汾州毛居テ、不^ニ音信^一ホト^ニ、人境共奪^ソ、

紀信領^ニ并汾^一兩國、不^レ朝^ニ咸陽^一、秦ノ始皇、打^レ落^ニ紀信^一、後^ニ紀信事^一高祖、云^レ尔、此^ノ說^ハ謬^也、唐ノ代吳元濟居^ニ蔡州^一城、押取^ニ并汾^一二州、不^レ隨^レ天下^而不^レ通^レ信、此^ノ城^ノ高聳^レ空^ニ、人難^レ到^レ故、不^レ能^ニ攻破^一、時^ニ天大雪^一、与^レ城^ノ齊^シ、此^ノ時^ニ李愬^ノ破^レ之[、]此^ノ城^ノ兒^如懸瓠^一、故^ニ曰^ニ懸瓠城^一ト也、大惠云、是^レ人境俱奪也、便有^ニ人境俱奪^一面目、又云、吾初讀^ニ諸家^ノ

僧云、師云、并汾絶信獨處一方、

此吳元濟カ古事也、并汾ハ、二州ノ名也、并与汾之中、有蔡州、々々ハ、吳元濟取^ニ蔡州^一也、又号^ニ懸瓠城^一、諸州逼蔡不降、故并汾絶^レ信^後、以^テ李愬^ノ謀^一、雪夜^ニ降^レ之[、]側多^ニ沼湫^一、雁鳧^ノ相集、李愬^ノ夜驚^ニ彼^ノ雁鳧^一、雁鳧^ノ鳴聲^ノ中^ニ降^ニ蔡州^一城、コレハ、始皇^ニシタガハナンタ物^ソ、言ハ、一方々々^ニ居^テ、音信^ヲセ^又程^ニ、人境共奪^ヲ体^ソ、大惠曰、吾シテ読^ニ諸家^ノ禪錄^一、見^ニ并汾^一信之語、深^ニ以^テ為^レ疑、雖^レ語^ニ諸老^一、皆含^テ糊^不不^レ弁、既見^ニ臨濟^一、則知^ニ絶信^一二字、蓋并汾二州名、云云、華叟云、此話ハ、句二有^ニ出身^ノ處^也、(38才)トコ力出身[、]受別傳ハ、四国ヘヒツコミテ居ル久也、死時并汾絶^レ信^ト云テ、死也、人境俱奪也、是便辭世ノ頌也、

禪録^一、見并汾紀信之ノ語^マ、深以テ為^レ疑ト、雖^ナ詰^ル諸老^一、皆含糊^シテ不^レ弁、既見臨濟ノ語^マ、則^チ知^ル絶信ノ二字^一、蓋并汾ハ二州名也、僧問、人境兩俱奪、答曰、独処一方、其旨既然^ク、方^ニ悟^ル諸師之ノ集、皆有^ニ烏焉之ノ誤^一、

僧云、如何、俱不奪トハ、所謂僧者、克符也、師云、王登、

是^ハ天子ノ御即位アツテ、目出度体ソ、宝殿^ハ、境也、野老^ハ人也、田夫^ヲ云也、謳^ハ、音ク歌聲也、万民王御即位、歎^ニ其^ノ德^ヲ而音歌^テ喜^レ之也、人境共^ニ不^レ奪体也、悟了同未悟、飯家尋^レ旧路ソ、コレハ、人ガ人境ノ惑ヲ受^ル程^ニ、云ハレタソ、コレヲダニ知^ラタラハ、知識モ学者モ惑セラレマイソ、大應云、此古則^ハ、イカウ慈悲カスキタソ、大灯云、コ、テコワイ(26オ)僧ガテヤウタラバ、林際^ハ、下手ニナラレウソ、華叟云、此古則^ハ、句々著力ノ処カアルソ、大灯下云、奪人不奪境、貧兒思^レ旧債^ハ、貧兒^ハ、奪^レ人方ソ、貧ナル者ハ、人ノマネヲ不^レ為^セ也、人非人也、思^レ旧債^ハ、不^レ奪^レ境^ヲ方ソ、奪境、胡僧坐^ニ少林ト云ハ、坐^ニ少林ニハ、不^レ出^ル世方ソ、是ハ八奪^レ境方ソ、胡僧ノ現シテ在^ルハ、不^レ奪^レ人ヲ方ソ、人境兩俱奪、老風引^ニ生姜トハ、風モ不^レ居^マ、又生姜^ヲ引^テ行^クテ、無ソ、人境兩俱奪処ソ、人境俱不^レ奪、李廣射^ニ石虎トハ、李廣ハ、人也、其カ射^ニ石虎一^マ、石ナル故^ニ、在^リ、是人境俱不^レ奪

僧云、如、師云、王登宝殿、野老謳詞、

コレハ、天子ノ御即位アツテ、目出度体ソ、宝殿ハ、境也、野老ハ、田夫ソ、人也、誕ハ、音ク歌フ声也、民同歎^ニ王德^ヲ而歌也、人境共^ニ不^レ奪体ソ、悟了同未悟、飯家尋^レ旧路ソ、是ハ、人ガ人境ノ或ヲ受^ルルホトニ、イハレタソ、コ、ヲダニ知^ラタラハ、知識モ学者モ惑セラレマイソ、大應云、此古則^ハ、イカウ慈悲カスキタソ、大灯云、コ、テコワイ僧ガ出合^ラタラハ、林際^ハ、手下ニナラレウソ、華叟云、此古則^ハ、句ニ著力ノ処カ在^ルソ、大灯下云、奪人不奪境、貧兒思^レ旧債^ハ、奪境不奪人、胡僧坐^ニ少林、人境兩俱奪、老風引^ニ生姜、人境俱不^レ奪、李廣射^ニ石虎、

別本云、師晚參、四料揀之段也、小參ト云ハ、一家之衆^ニ示^ス也、(38ウ)上堂^ハ、江湖之衆共^ニ示^ス也、一家ト云ハ、會下ノ衆ハカリ也、奪ハ、不立之義也、不奪ハ、建立之義也、坐禅底ハ、四句ヲ俱^ニ奪^テ、脱体現成シテ一切放下スル也、未^レ奪^レ境、山河大地之起也、雖^レ奪^レ境未^レ奪^レ人、立^レ人也、或俱^ニ不^レ奪、或八俱^ニ奪ソ、如此四三料簡スル

処ソ、又、王登宝殿、即位也、存^{スル}人也、野老ハ、田夫也、謳者、^{ヒシキ}齊聲也、歌者、柯也、樹ノ梢葉、人聲相似、是人境俱不^レ奪也、大惠云、此人境俱不^レ奪也、

也、奪境ハ、万法販^レ一、不^レ奪境ハ万法歴然也、或抄云、奪人トハ、奪^ニ主人公、即無位真人ノ類也、奪境トハ、奪^ニツシ身^ニマ、即地水火風ノ四大ヲ不^レ立、煦日、上句ハ、不^レ奪境也、朝日出則ハ、地上ノ草木花葉相映シテ、尽大地也、但一段ノ錦也、是境分明^ニ不^レ奪也、發生トハ、暖日自^ニ東方^ニ出ル也、下句奪人也、櫻孩、言ハ、常小兒ハ髮黒シ、然ル^ニ、髮白シテ如^レシ糸、故^ニ非^レ人は奪人也、王令、王令ハ、天子ノ号令也、天下徧シトハ、囊中悉順^ニ天子ノ号弘^ニマ、万法販^レ一、此句ハ、唯天子一人耳ナレハ、不^レ立境、不^レ奪^レ人也、上^ニ天子アレハ也、塞外ハ、居^{イナ}中也、煙塵ハ、兵火ノ塵埃也、絶ストハ、静^シ兵乱^也マ、此ノ句ノ意モ、唯塞外ハ(39才)將軍一人耳ナレハ、不^レ立境、故^ニ有^ニ將軍^ニ不^レ奪^レ人は是^レ奪也、并汾、独処一方、各々絶信、言ハ、間不容髮也、是人境俱^ニ奪^ニ之義也、張九成曰、至^ニ人境^ニ而俱^ニ奪^ニ、不^レ覺欣然、大惠云、余則不然、公曰、師意如何、惠曰、打^ニ破蔡州城^ニ、殺^ニ却吳元濟^ニマ、公於^ニ言下^ニ、得大自在也、王登、云^レ五^ト、云^レ楚老^ト、云^ニ宝^ト、人境俱^ニ奪^ニ不^レ奪、是向上ノ位也、山是山、水是水、人民収^ニ奪^ニシテ哥舞之時節也、太平无^レ事之位也、不^レ可^レ着矣、悟得夕見也、是法住法位、世間相常住、

註

- (1) 玉村竹二「臨濟宗幻住派」、『日本禅宗史論集下之二』所収)
- (2) 拙稿「中世曹洞宗における本參資料研究序説(一)」、『禪學研究』第七六號、一九九八・三)
 - 同 右「中世曹洞宗における本參資料研究序説(二)」 円
 - 応寺蔵「二十七通句」、『秘密正法眼蔵』を中心として
 - (『駒澤大學佛教學部研究紀要』第五七號、一九九九・三)
 - 同 右「中世曹洞宗における本參資料研究序説(三)」 峨
 - 山關連抄物と円応寺所蔵本參について 『駒澤大學佛教學部論集』第三〇號、一九九九・一〇)
 - 同 右「中世曹洞宗における本參資料研究序説(四)」 夜
 - 參と三位の透句を中心として(上) 『駒澤大學佛教學部研究紀要』第五八號、二〇〇〇・三)
 - 同 右「中世曹洞宗における本參資料研究序説(五)」 夜
 - 參と三位の透句を中心として(中)、『駒澤大學佛教學部論集』第三號、二〇〇〇・一〇)
 - (3) 拙稿「潔堂派所伝の切紙について 常光寺蔵切紙の紹介」、『駒澤大學大学院仏教学研究會年報』第二九号、一九九六・五)
 - (4) 拙稿「潔堂派切紙に関する一試論 常光寺資料を中心として」、『駒澤大學禪研究所年報』第七號、一九九六・三)
 - (5) 石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論(五) 巖林行持關係を中心として」、『駒澤大學佛教學部研究紀要』第四三号、一九八五・三)
 - 同 右「中世曹洞宗切紙の分類試論(十七) 參話(宗旨・公案・口訣)關係を中心として(中)」、『駒澤大學

- 佛教學部研究紀要』第四九号、一九九一・三)
- 同 右「禅宗相伝資料の研究」下巻、「第七章 參話(宗旨・公案・口訣)關係切紙」(法藏館、二〇〇一・五)
- 安藤嘉則「洞門抄物における夜參の研究」、『曹洞宗研究員研究紀要』第二四号、一九九三・九)
- 同 右「曹洞三位の研究(一)」、『駒澤女子大学研究紀要』第三号、一九九六・一二)
- 同 右「曹洞三位の研究(二)」、『駒澤女子大学研究紀要』第四号、一九九七・一二)
- 同 右「中世禅宗文献の研究」第三章「曹洞三位と夜參の研究」(国書刊行會、二〇〇〇年刊)
- (6) 切紙等の伝承に拠れば、通幻より了庵慧明へと夜參が付囃されたとする。この伝承は、夜參及び三位の由来を説く際にしばしば引用されるものである。
 - 夜參ト者ハ、日本ニ云処ノ語、陞堂、上堂ノアル則ンバ、小參アリ、晚參アリ、日本ニモ此旨ハアリトイエドモ、靈和尚老後迄、此旨ヲ不許給、御遷化ノ砌、於青原山永澤寺行初玉上リ、然ハ、陞堂、上堂無之間、一抄ト号シ、朝參ト名、晚參ヲ号夜參ト云、此大法ハ、嗣法伝底ノ法師、第一人ニ可付者也、然間、自餘、此旨ヲ不許玉、最兼開山了庵和尚一人付シ玉ヘリ。其ノ餘ノ九派ハ、傍出也、了庵モ又々如此ナルベシ、夜參ト者ハ、密語也、陰法ヲ云也、朝參ト者ハ顯也、陽法也、陰陽ニ比シタト云テ、陰氣陽光屬シタトミベカラス、其ノ言ヲ借也、朝參ハ、顯法ナルガ故ニ、時々交互ノ幾可有、夜參ト者ハ、密語ナル呈ニ、時々不交互ノ幾アルベシ、只サシヲカズ、此ノ書ヲミテ、工夫

領解スベキ者也、転凡人聖用之、一転凡人聖ノ格、ドレモ
転凡人聖ニワズレマジキコトナレドモ、句ノ骨格ヲ云ハ
キ爲ニ如此也、

また、無極派の派下の本参の体系は、(1) 死活当頭一句子、

- (2) 転凡人聖自己、(3) 々々転処、(4) 自己不転、(5)
自己醒処、(6) 自己目前兩墀之隔、(7) 自己目前一致、(8)
自己真照淵源、(9) 臺麓之功迷、(10) 智不到一句子、(11)
智不到之功位迷、(12) 清白円明智不到、(13) 智不到転処、
(14) 智不到不転、(15) 智不到不転々々、(16) 智不到異弁異眼
功位、(17) 玄路通処、(18) 那边承当、(19) 那边透過、(20)
那边駄得、(21) 這裡行履、(22) 阿誰勤弁、(23) 那时三玄勤
弁、(24) 那时窮極、(25) 位裡転側、(26) 裡頭却参、(27)
偏正一致、(28) 目前転側、(29) 外頭却来、(30) 那边退得這
裡行李、(31) 衲僧本分之行履、(32) 衲僧要活、(33) 衲僧
活要であるとする。

(7) 椎名宏雄『秘密正法眼蔵』の諸本、(8) 壁山禪『第十一卷所

収、一九九一・三)

竹内弘道『壁山禪師の著作について』(四) 『秘密正法眼

蔵』の考察、(『宗学研究』第三〇号、一九八八・三)

石川力山『秘密正法眼蔵』について、(『宗学研究』二〇〇号、

一九七八・三)

同右、『秘密正法眼蔵』再考、(『宗学研究』二二二号、一九七

九・三)

石川氏は上記の論考の中で、『秘密正法眼蔵』を本参として、
室町時代における公案禅援用の歴史の中で位置づけられてい
る。又、『永平寺秘密頂王三昧記』との相関関係を指摘し、

中世林下における語録抄と密参録について(上)(飯塚)

『秘密正法眼蔵』十則の公案拈提部分は通幻寂靈派下によつて
付加されたものではないかと推定されている。さらに本書所
載の公案が新たな本参として展開していった例として、了庵
派の門参である龍泰寺蔵本蔵本と石屋派の円応寺本について
も言及されている。

(8) 石川力山『義雲編とされる『永平頂王三昧記』について』
(駒澤大學佛教學部論集、第八号、一九七七・一〇)

同右、『永平秘密頂王三昧記』再考、(駒澤大學佛教學部論
集、第二二号、一九八一・一〇)

(9) 『如元格外集』ともいい、前述の常光寺蔵参和目錄にも、以
下のように取り上げられている。

伝後参自是在

- (128) 枯木竜吟(129) 井驢之話(130) 得失之話(131) 知不知
之話(132) 首山竹篋(133) 倩女離魂(133) 樹上之話(135)
竿頭進步話(136) 吸尽去也(137) 阿誰之話(138) 牛窓欄
(139) 法眼窓之話(140) 劍刃上(141) 徳山托鉢話(142) 達道
人話(143) 大死底之話(144) 外道問仏(145) 三機輪之話
(146) 二祖安心(147) 混頓未分話(148) 清稅孤貧(149) 即心
即仏(150) 麻三斤(151) 栢樹子話(152) 船舷未跨禪(153)
虚空五字之話(154) 有句無句(155) 女子出定(156) 拈華話
(157) 野狐之話(158) 向去却来話(159) 別山相見(160) 孤峰
不白(161) 不識上一句
合三十四則、是伝后之参也。

天童如浄和尚、此目錄義尹和尚附与也。可秘々々。天童三
十四話下目錄乘。

また、『永平寺三十四話本参』が龍澤寺に現存する。

(10) 『永平総目録』に關連のある御州書写の本参が永平寺に所蔵されている。表紙題箋に「伝三清規」とあり、その内題に「吉祥山永平禅師話頭総目録」とあるのがそれである。その表紙見返しには、

此題吉祥山永平禅師話頭之仮名書一冊者、中古住此山代語僧之所述、而固非從承陽・二代・三代等時、伝之采有底也、宜考其時、以知其人而用否焉、
延享二乙丑孟夏

住山円月誌之

とあり、永平寺四二世円月江寂(一六九四)一七五〇、大智恵光禅師(は、本書を中古永平寺住山の代語僧による著述(偽作)として批判している。これは、面山瑞方、洞上室内断紙撰非私記』や承天則地「旧本除却弁」に見られる切紙相伝の批判、代語僧批判の論調と軌を一にするものである。

(11) 拙稿『大徳寺夜話』について 養叟会下の記述を中心として 『宗学研究』第三四号、一九九二・三)

同右 『龍谷大学図書館蔵』大徳寺夜話』をめぐって(一)

(二)(三) 『駒澤大学禅研究所年報』第一〇号、一九九九・

三、第一号、二〇〇〇・三、第二号、二〇〇一・三)

(12) 『龍谷大学図書館蔵』大徳寺夜話』をめぐって(一)(二)において翻刻している。

(13) 拙稿『大徳寺派系密参録について(一) 雲門録密参録を中心として』 『宗学研究』第三六号、一九九四・三)

同右 『大徳寺派系密参録について(二) 臨濟録』の

密参録を中心として 『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第二七号)

同右 『大徳寺派系密参録について(三) 碧巖録龍巖和尚秘辨』を中心に 『曹洞宗研究員研究紀要』二五号、一九九四・九・二〇)

同右 『大徳寺派系密参録について(四) 碧岩類則密参録』について(『宗学研究』第三七号、一九九五・三)

同右 『大徳寺派系密参録について(五) 百則密参録』

を中心にして 『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』二八号)

拙稿『大徳寺派系密参録について(六) 駒澤大学図書館蔵』百則』・五十則』の翻刻 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第五九号、二〇〇一・四)

拙稿『大徳寺派系密参録について(七) 駒澤大学図書館蔵』百五十則』公案集について 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第六〇号、二〇〇二・三)

拙稿『大徳寺派系密参録について(八) 駒澤大学図書館蔵』百五十則』公案集について 『駒澤大学佛教学部論集』第三三号、二〇〇二・一〇)

拙稿『大徳寺派系密参録について(九) 駒澤大学図書館蔵』百五十則』公案集について 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第六一号、二〇〇三・三)

同右 『大徳寺密参録賞書(一) 碧岩類則』を中心として 『駒澤大学佛教学研究』第四号、二〇〇一・三)

同右 『大東急記念文庫蔵』碧岩録古抄』について 『曹洞宗研究員研究紀要』第二四号、一九九三・九・二〇)

(14) 石川力山 『人天眼目抄』について 『印仏研』二六一・二、一九七八・三)

外山映次「二つの人天眼目抄」西福寺蔵本と川僧抄と

〔川瀬一馬博士古稀記念 国語国文学論集、一九七九年刊〕

柳田征司「室町時代語資料としての抄物の研究 下冊」第九章第二節「日光山天海蔵」人天眼目聞書」と常州佐竹における抄物作成活動」(武蔵野書院、一九九八年刊)

拙稿「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について」(一)

(二)「曹洞宗研究員研究紀要」第二七・二八号、一九九六・七、一九九七・一〇)

拙稿「大東急記念文庫所蔵『人天眼目批郚集』について

『人天眼目抄』における位置づけを中心にして」(駒澤大學佛教學部論集、第二七号、一九九六・一〇)

(15) 大徳寺派系の『臨濟録抄』としては、たとえば駒澤大學所蔵本、足利学校遺跡図書館所蔵本・叡山文庫本等は、養叟宗願の講義の聞書を基盤に成立した語録抄であるが、密参の解釈は別であるとの指摘が作されている箇所があり、これら講義の聞書を基盤とする「語録抄」と「密参録」とは相互補完的關係にあったと推定される。「語録抄」が少なくともある程度の公開性を持っていたのに対して、「密参録」は師家と学人の秘密伝授を前提にしている。両者の性格は相互に影響を及ぼしあつた結果、その境界は曖昧化してゆく過程をたどることになる。

柳田征司「大応派の『臨濟録抄』について」(松ヶ岡文庫研究年報、第六号、一九九二、後に『室町時代語資料としての抄物の研究 上冊』第三章第二節、六五七頁以下に所収、一九九八・一〇、武蔵野書院刊)

拙稿「駒澤大學蔵『臨濟録抄』について 臨濟録の講義と

密参との關係を中心にして」(曹洞宗研究員研究紀要、第二

三号、一九九二・九)

同 右「尊經閣文庫蔵『臨濟録抄』について」(宗学研究、第三五号、一九九三・三)